

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第204集

松原市

三宅西遺跡Ⅱ

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年7月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第204集

松原市

三宅西遺跡Ⅱ

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



調査地遠景（東から）

序 文

三宅西遺跡は、大阪府の中央部、松原市の北側に位置する、縄紋時代から中世にかけての複合遺跡です。

今回の発掘調査は、都市計画道路大和川線外の建設に伴って計画された今井戸川付け替え工事及び、取水施設整備事業に伴うものです。

遺跡範囲の南端部にあたる今回の発掘調査では、建物を構成する柱穴を確認したほか、中世～近世の基幹水路を検出し、その成立年代を考える上で、重要な遺物を確認することができました。

本遺跡は、2004年度から継続的に実施してまいりました都市計画道路大和川線の建設に伴う発掘調査によって初めて本格的な発掘調査データが得られた遺跡でもあり、従来明らかでなかった周辺域の様相を窺い知る上でも極めて重要なものとなっております。

当遺跡の西側に隣接する池内遺跡では、遺跡範囲を南北に通る都市計画道路の建設工事に伴う発掘調査も実施されており、これらの成果が周辺地域の総合的な歴史の解明に寄与することを切に願います。

最後に、調査に際して、大阪府富田林土木事務所ならびに大阪府富田林土木事務所松原建設事業所、城連寺地区自治会、大阪府教育委員会、松原市教育委員会をはじめとする、関係者の方々のご指導、ご協力に感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの埋蔵文化財調査事業に一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

平成 22 年 7 月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正 好

例 言

1. 本書は、都市計画道路 大和川線外 建設及び、都市計画道路 大和川線 今井戸川取水施設 整備工事に伴う三宅西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府富田林土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査・遺物整理に関わる受託契約期間および調査体制については以下のとおりである。

〔発掘調査〕

〔三宅西遺跡 09－2 発掘調査〕

受託契約名 都市計画道路 大和川線外 池内遺跡（その3）・三宅西遺跡（その2）発掘調査委託

受託契約期間 平成20年8月1日～平成22年3月31日

調査体制

〔平成20年度〕

調査部長 赤木克視

調査課長 田中和弘

南部調査事務所所長 大野 薫

調査第一係係長 中村淳磯

技師 正岡大実

〔平成21年度〕

調査部長兼調査課長 福田英人

調整グループ長 金光正裕

調整グループ南部総括主査 森屋美佐子

技師 正岡大実

〔三宅西遺跡隣接地 09－1（後に三宅西遺跡 09－2 と改称） 発掘調査〕

受託契約名 都市計画道路 大和川線 今井戸川取水施設整備工事に伴う
三宅西遺跡隣接地確認調査委託

受託契約期間 平成21年7月1日～平成21年9月30日

調査体制 調査部長兼調査課長 福田英人

調整グループ長 金光正裕

調整グループ南部総括主査 森屋美佐子

技師 正岡大実

〔遺物整理〕

〔三宅西遺跡 09－2 遺物整理〕

受託契約名 都市計画道路 大和川線外 池内遺跡（その3）・三宅西遺跡（その2）発掘調査委託

受託契約期間 平成20年8月1日～平成22年3月31日

調査体制

〔平成 20 年度〕

調査部長 赤木克視

調査課長 田中和弘

南部調査事務所所長 大野 薫

調査第一係係長 中村淳磯

技師 正岡大実

〔平成 21 年度〕

調査部長兼調査課長 福田英人

調整グループ長 金光正裕

調整グループ南部総括主査 森屋美佐子

技師 正岡大実

〔三宅西遺跡 09 - 2 遺物整理〕

受託契約名 都市計画道路 大和川線外 三宅西遺跡（その 2）調査委託

受託契約期間 平成 22 年 4 月 1 日～平成 22 年 7 月 30 日

調査体制 調査部長兼調査課長 福田英人

調整グループ長 江浦 洋

調整グループ主幹 岡本茂史

調査グループ長 岡戸 哲紀

調査グループ南部総括主査 森屋美佐子

4. 本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、非常勤職員 久禮孝志が担当した。発掘調査・遺物整理にあたっては、随時当財団職員の助言・協力を得た。
5. 調査にあたっては、以下の諸機関・諸氏よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。
（敬称略・順不同）
大阪府富田林土木事務所・大阪府富田林土木事務所松原建設事業所・松原市教育委員会・大阪府教育委員会・阪神高速道路城連寺地区対策協議会・岡本武司・芝田和也・山上 弘
6. 本書の執筆・編集は、森屋・正岡が担当した。
7. 本調査に関わる出土遺物・実測図・写真・カールスライド・デジタルデータ等は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 水準については、すべて東京湾平均海水位（T.P.）＋値を使用している。本文の記述では、特に断りのない限り「T.P.＋」の記載を省略している。
2. 調査にあたっては、国土座標軸（使用測地系「世界測地系 2000」）第VI座標系を基準にしている。また、遺構図に記載した座標値はmで表示している。
3. 本書に掲載した遺構図に付された方位は、すべて国土座標に基づく座標北を示している。なお、座標北を基準とした場合、遺跡周辺の磁北はN 6° 27′ Wに、真北はN 0° 13′ Eに偏位している。
4. 発掘調査および遺物整理については、『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003）の内容に準拠して行った。その詳細については第三章に記述している。
5. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）の『新版 標準土色帖』2006年版を基準としている。
6. 遺構名は、遺構の種類に関係なく、各調査時の検出順に付与した1からの連番号に遺構の種類を付して、「10土坑」のように表記している。また、掘立柱建物や杭列など、複数の遺構から構成される遺構については、「掘立柱建物 1」のように遺構番号と遺構の種類を逆転させて表示している。
7. 本文中に記載する基本的な地層については、既往の成果（大文セ 2009）に準じて把握しており、この層準名の冒頭に「第」を付して個別遺構の層名と区別している。すべての層準名が同一の層準を必ずしも示さない場合もあることから、調査区毎に地層の概略を記した。

遺構面については、断面観察によって遺構・遺物の存在が予想された土壤化層を基準に上から順に第1面・第2面…と呼称した。
8. 各種遺構・遺物の記述にあたっては、規模等の数値について、遺構がm表記、遺物がcm表記を基準としている。なお、遺構の数値については、小数点第3位以下を四捨五入し、最小で小数点第2位のcm単位までの表記としている。遺物の数値については、小数点第2位以下を四捨五入し、最小で小数点第1位のmm単位までの表記としている。
9. 遺物番号は通し番号で付与しており、写真に関しては挿図番号と同一の番号を記載している。
10. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、4分の1を基本にしている。

なお、遺物写真の縮尺は任意である。
11. 基本的な遺物の年代観等は、下記の文献を参考に用いた。

寺沢 薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編 I』 木耳社

田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店

古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成 I』 古代の土器研究会

古代の土器研究会編 1993 『古代の土器 2 都城の土器集成 II』 古代の土器研究会

古代の土器研究会編 1994 『古代の土器 3 都城の土器集成 III』 古代の土器研究会

佐藤 隆 1992 「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告 V』

(財)大阪市文化財協会

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

目 次

卷 頭 図 版	
序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 発掘調査・整理作業の経過	1

第 II 章 位置と環境

第 1 節 遺跡の位置と地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	4

第 III 章 調査の方法

第 1 節 現地調査	7
第 2 節 整理作業	7

第 IV 章 09 - 2 調査の成果

第 1 節 3 ～ 5 区の調査成果	9		
1. 基本層序	2. 第 1 面	3. 第 2 面	4. 第 3 面
5. 第 4 面	6. 第 5 面	7. 小結	
第 2 節 1 区の調査成果	16		
1. 基本層序	2. 第 1 面	3. 小結	
第 3 節 2 区の調査成果	18		
1. 基本層序	2. 第 1 面	3. 第 2 面	4. 第 3 面
5. 小結			

第 V 章 総括

第 1 節 遺跡の構造変遷	28
---------------	----

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

- | | | | |
|------|----------------------------|------|----------------------------|
| 図 1 | 遺跡位置図 | 図 15 | 2区 北壁 断面図・各面 平面図 |
| 図 2 | 三宅西遺跡 調査地位置図 | 図 16 | 2区 第1面 各遺構 断面図 |
| 図 3 | 三宅西遺跡周辺の地形環境 | 図 17 | 2区 第1・2面 各遺構 出土遺物 |
| 図 4 | 三宅西遺跡周辺の遺跡分布図 | 図 18 | 2区 第2面 117土坑 平・断面図
出土遺物 |
| 図 5 | 三宅西遺跡周辺の条里地割図 | 図 19 | 2区 第2面 110溝 平・断面図
出土遺物 |
| 図 6 | 調査区の配置と地区割 | 図 20 | 2区 第2面 掘立柱建物1 平・断面図 |
| 図 7 | 3・4区 東壁面 断面図 | 図 21 | 2区 第2面 各遺構 断面図 |
| 図 8 | 3～5区 各面 平面図 | 図 22 | 2区 第3面 各遺構 断面図 |
| 図 9 | 3～5区 第2面 3流路 出土遺物 | 図 23 | 2区 第2～3層 出土遺物 |
| 図 10 | 3～5区 第1～5面 各遺構 断面図
出土遺物 | 図 24 | 中世～近世の三宅西遺跡（第3層下面） |
| 図 11 | 3～5区 第2面 15溝 5土坑
出土遺物 | 図 25 | 弥生時代～古代の三宅西遺跡
（第7層下面） |
| 図 12 | 3～5区 各層 出土遺物 | 図 26 | 縄文時代の三宅西遺跡（第9層上面） |
| 図 13 | 1区 東西断面図・第1面 平面図 | | |
| 図 14 | 1区 第1面 24水路 出土遺物 | | |

写 真 図 版 目 次

- | | | | |
|------|----------------|------|-------------------|
| 図版 1 | 3～5区 遺構 | 2. | 3区 第2面 3流路 遺物検出状況 |
| 1. | 3区 基本層序 | 3. | 3区 第2面 3流路 遺物検出状況 |
| 2. | 4区 基本層序 | 4. | 4区 第2面 15溝 断面 |
| 3. | 5区 基本層序 | 5. | 3区 第2面 5土坑 断面 |
| 図版 2 | 3～5区 遺構 | 6. | 3区 第2面 5土坑 遺物検出状況 |
| 1. | 3区 第1面 全景 | 7. | 3区 第2面 4土坑 |
| 2. | 4区 第1面 全景 | 8. | 3区 第2面 4土坑 断面 |
| 図版 3 | 3～5区 遺構 | 図版 6 | 3～5区 遺構 |
| 1. | 3区 第1面 1土坑 断面 | 1. | 3区 第3面 全景 |
| 2. | 5区 第1面 23水路 | 2. | 4区 第3面 全景 |
| 3. | 5区 第1面 23水路 断面 | 3. | 3区 第3面 7溝 |
| 図版 4 | 3～5区 遺構 | 図版 7 | 3～5区 遺構 |
| 1. | 3区 第2面 全景 | 1. | 3区 第4面 全景 |
| 2. | 4区 第2面 全景 | 2. | 4区 第4面 全景 |
| 図版 5 | 3～5区 遺構 | 図版 8 | 3～5区 遺構 |
| 1. | 3区 第2面 3流路 断面 | 1. | 4区 第4面 17土坑 断面 |

2. 3区 第4面 13土坑 断面

3. 3区 第5面 10溝 断面

図版9 1区 遺構

1. 第1面 全景

2. 基本層序

図版10 2区 遺構

1. 西側 基本層序

2. 中央部 基本層序

3. 東側 基本層序

図版11 2区 遺構

1. 西半部 第1面 全景

2. 東半部 第1面 全景

図版12 2区 遺構

1. 第1面 101 落ち込み 断面

2. 第1面 69井戸 断面

3. 第1面 42土坑 断面

4. 第1面 48土坑 断面

5. 第1面 51土坑 断面

6. 第1面 49土坑 断面

7. 第1面 43土坑 断面

8. 第1面 84土坑 断面

図版13 2区 遺構

1. 西半部 第2面 全景

2. 東半部 第2面 全景

図版14 2区 遺構

1. 第2面 掘立柱建物1

2. 掘立柱建物1 118 柱穴 断面

3. 掘立柱建物1 119 柱穴 断面

4. 掘立柱建物1 120 柱穴 断面

5. 掘立柱建物1 121 柱穴 断面

図版15 2区 遺構

1. 第1・2面 100 溝 断面

2. 第1・2面 100 溝 遺物検出状況

3. 第2面 110 溝 断面

4. 第2面 110 溝 遺物検出状況

5. 第2面 108 溝 断面

6. 第2面 109 溝 断面

7. 第2面 102 溝 断面

8. 第2面 106 溝 断面

図版16 2区 遺構

1. 第2面 117 土坑 断面

2. 第2面 117 土坑 遺物検出状況

3. 第2面 104 落ち込み 断面

図版17 2区 遺構

1. 西半部 第3面 全景

2. 東半部 第3面 全景

図版18 2区 遺構

1. 第3面 139 流路 断面

2. 第3面 141 流路 断面

3. 第3面 142 流路 断面

図版19 遺物

3～5区 第2面 3流路 出土遺物

図版20 遺物

3～5区 第2面 3流路

第3面 7溝出土遺物

2区 第1・2面 99・100 溝 出土遺物

図版21 遺物

2区 第1・2面 100 溝 出土遺物

2区 第2面 110 溝 出土遺物

2区 第2～3層 出土遺物

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

大阪南部地域では、既存の幹線道路、特に東西方向の道路の混雑が著しく、円滑な交通の確保が難しくなっており、今後の更なる交通量の増大や都市圏の広域化を考えた場合、これに対応できる道路の整備が極めて重要になっている。また、都心部を走る阪神高速道路 1 号環状線の混雑は慢性的なものとなり、沿道環境への影響が懸念されている。これらの問題を解決するべく、自動車交通の流れを抜本的に変革し、都心部の慢性的な渋滞や沿道環境の悪化等を大幅に緩和する、新たな環状道路の整備として、大阪府道高速大和川線（以下、大和川線）が計画された。この都市計画道路の建設計画は大阪府富田林土木事務所松原建設事業所によって計画され、計画路線内に周知の遺跡である三宅西遺跡や池内遺跡、大和川今池遺跡などが所在していることから、協議の結果、本事業に関わる埋蔵文化財の発掘調査については、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、(財)大阪府文化財センターが実施することとなった。協議の内容や協議に基づく既往の調査の経緯・経過については、既刊の関連発掘調査報告書に詳細を記している（大文セ2009・2010）。

本書に所収した埋蔵文化財の発掘調査は、道路建設に関連する付帯工事として、主に三宅西遺跡の範囲内で計画された、今井戸川の付け替え工事及び、取水施設の整備事業に伴うものである。

第 2 節 発掘調査・整理作業の経過

発掘調査は、大きく 4 地点が対象である。これらの対象区域については、大阪府富田林土木事務所から発注された順番にしたがって、それぞれ三宅西08-1 調査・三宅西09-1 調査・三宅西隣接地09-1

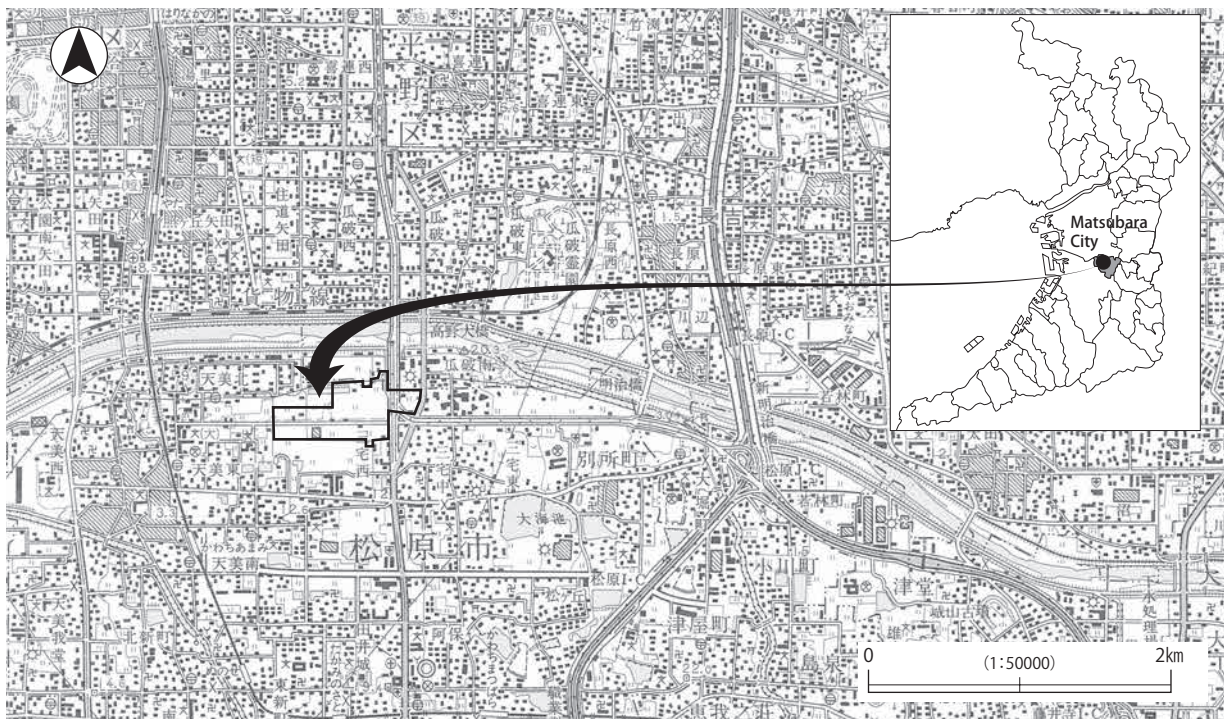


図 1 遺跡位置図

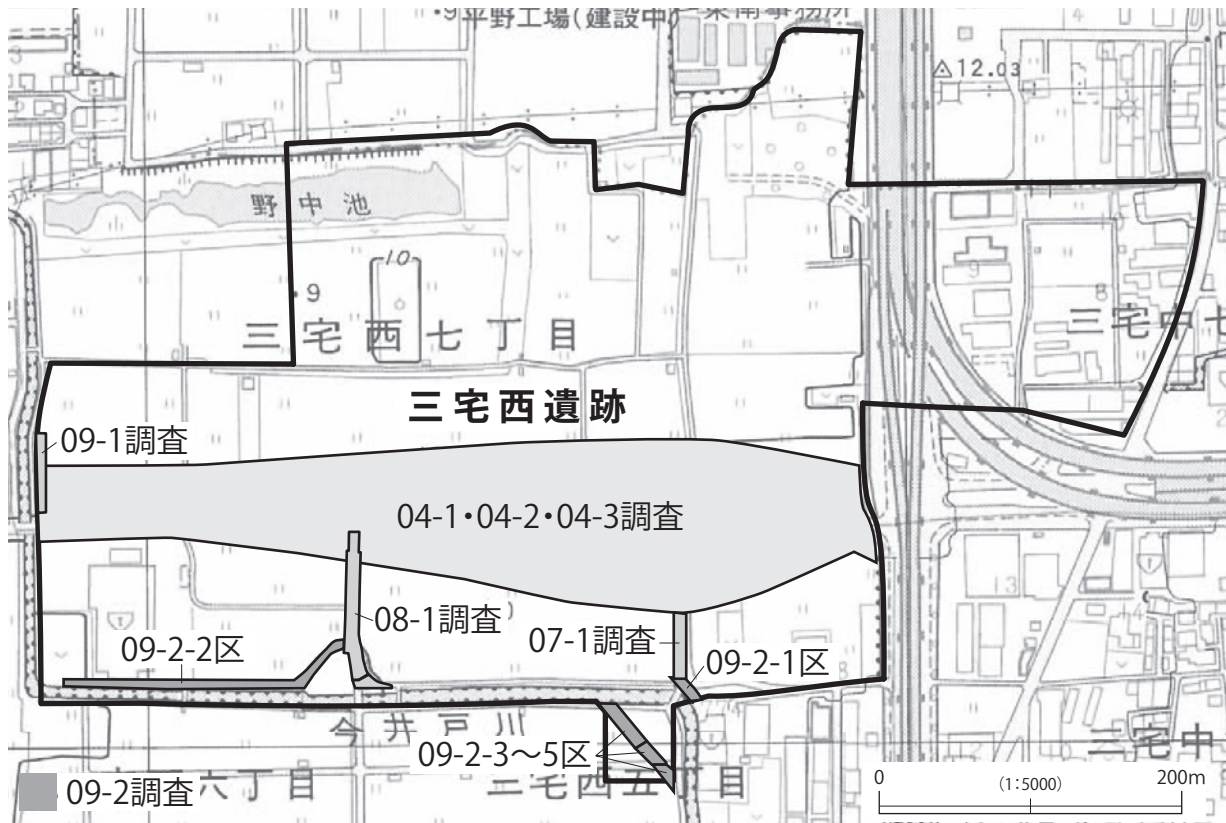


図2 三宅西遺跡 調査地位置図

確認調査（遺跡範囲の拡大に伴い、09-2調査に収斂）・三宅西09-2調査と調査名称を付与し、調査を実施した。

このうち、08-1調査と09-1調査の成果については、既に平成21年度に刊行した池内遺跡の発掘調査報告書（大文セ2010）に付編として掲載しているため、本書は後二者の三宅西09-2調査の成果について報告するものである。以下、09-2調査の経緯と経過を述べる。

09-2調査は、全部で5つの調査区に分割して調査を実施した。1・3～5区は東側、2区は西側に位置している（図2・6）。このうち、3～5区は、当初遺跡範囲外であった隣接地区について、確認調査を実施したものであり、確認調査の結果、遺構・遺物の分布が認められたことから、遺跡範囲に含まれることとなった。確認調査は、調査番号を三宅西隣接地09-1とし、調査を実施した北側から順に09-1-1・2・3区と枝番号を付与することでこれを区別した。その後、遺跡範囲の拡大が図られたことで、三宅西遺跡09-2-3・4・5区として番号を付与しなおしている。

各調査区の調査面積は、3～5区が340㎡、1区が105㎡、2区が702㎡を測る（図2・6）。

それぞれの事業に要した調査期間は、3～5区が平成21年7月15日～8月25日・9月2日・11日、1区が平成21年10月9日～23日、2区が平成22年1月13日～3月1日である。

以上の発掘調査では、コンテナに換算して約7箱に及ぶ遺物が出土し、それぞれの発掘調査が終了した段階で南部調査事務所にて報告書作成に向けた出土遺物の整理作業を行った。

本事業では、現地で作成した遺構図面の整理・トレース、特徴的な遺物の抽出・接合・復元並びに実測・トレースを行い、それぞれの版下を作成したほか、遺物の写真撮影と、遺構・遺物写真図版版下の作成、各台帳類の作成・整備と遺物の収納を実施し、平成22年7月30日に本報告書の刊行をもってすべてを完了した。

第Ⅱ章 位置と環境

本章では、三宅西遺跡に関連する地理的環境と歴史的環境の概要を述べる。なお、本書に関連する事業の既刊報告書である『三宅西遺跡』〔(財)大阪府文化財センター2009〕第1分冊第2章において、本遺跡の東側に展開する瓜破台地周辺の古環境と地質の概要及び文献上に表れる「三宅」地名についての文献上の記録等は、その詳述されていることから、ここでは、遺跡の概要を記すにあたり、最低限必要と考えられる事項のみを記述することとする。

第1節 遺跡の位置と地理的環境

三宅西遺跡の所在する松原市は、大阪府のほぼ中央部に位置する。市域の広さは約16.7km²で、人口約12万5千人（平成20年5月推計）の都市である。市域の北側を大和川が東西方向に流れており、川をはさんだ北側は大阪市東住吉区・平野区、東側から南側にかけては、堺市北区・美原区、西側は八尾市・藤井寺市・羽曳野市と接する。

三宅西遺跡は、松原市三宅西7丁目を中心に広がる縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、その範囲は東西750m、南北400mに及ぶ。

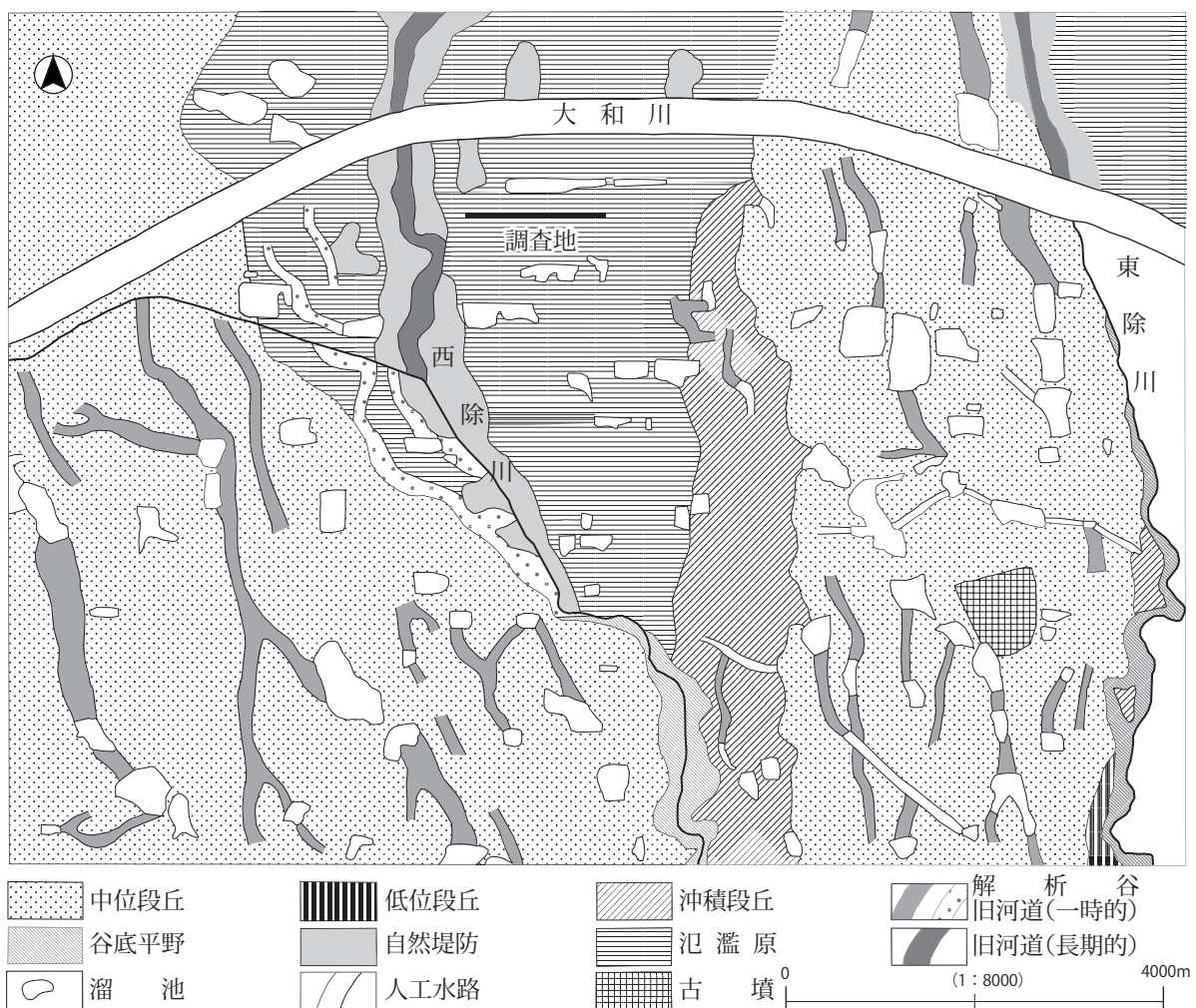


図3 三宅西遺跡周辺の地形環境〔日下1981を元に作成、一部改変〕

池内遺跡と三宅西遺跡は、日下雅義氏の分類（日下1981）によると、調査区の西方を南北方向に流れていた西除川の氾濫原に位置する。今回の発掘調査対象となった三宅西遺跡の東側には、現在の三宅集落が展開しており、南から北へ延びる河内台地上に立地している。その河内台地は現大和川以北では瓜破台地と呼ばれる。遺跡の東端部は、ちょうど西除川の氾濫原と沖積段丘の境界部分となるが、現地表面では明確な段差は認められない。この河内・瓜破台地は、最終氷期に「古天野川」によって形成された扇状地がそれ自身の浸食で段丘化したものと考えられており、主として中位段丘面で構成される。中位段丘面は南から北に向かって緩やかに低くなり、現大和川の北側部分で沖積平野の地下に埋没する。

6世紀後半から7世紀初頭頃に、「古天野川」の開析により形成された谷底平野を堰き止めて、狭山池が造られた。この狭山池からの主たる流路が東除川と西除川である。本遺跡の立地する氾濫原の形成に大きく影響を及ぼしたと考えられる旧西除川は、18世紀初頭に大和川が付け替えられ、現在の流路になるまで、狭山池から北流し、平野川と合流した後に天満川と合わさり、大阪湾に注ぎこんでいた。

以上のような地形環境の下、度重なる地層の罫重によって、三宅西遺跡は形成されてきた。

第2節 歴史的環境

松原市域は、古くは河内国に属しており、その中で丹比郡と称された地域にあたる。丹比郡は後に三分割され、そのうちの丹北郡に属することになる。こうした背景の下、本遺跡が立地する河内平野南部には、多数の遺跡が分布しており、そのうちのいくつかについては、継続的な発掘調査が実施され、重要な成果が挙げられているものもある。本節では、これらの周辺遺跡の動向を概観しておく。

三宅西遺跡の西側には、池内遺跡、北西側に城連寺東遺跡、城連寺遺跡、南側に天美南遺跡、天美東1丁目遺跡、田池下遺跡、三宅西4丁目遺跡、東側に三宅遺跡などが隣接する。また、北側には大阪市域に瓜破遺跡が広がっている。ただし、古墳時代～中世の遺跡とされる城連寺東遺跡や弥生時代～中世の城連寺遺跡、弥生～古墳時代の天美南遺跡、中世の天美東1丁目遺跡、古墳～中世の田池下遺跡、弥生時代の三宅西4丁目遺跡の実体は、発掘調査などが行われておらず、実態はほとんど不明である。

台地上に位置する三宅遺跡は、現在の集落内であることから本格的な調査が行われていないが、小規模な発掘調査により、弥生時代の流路や古墳時代の溝、平安時代や中世の掘立柱建物などを検出し、遺物も出土している。

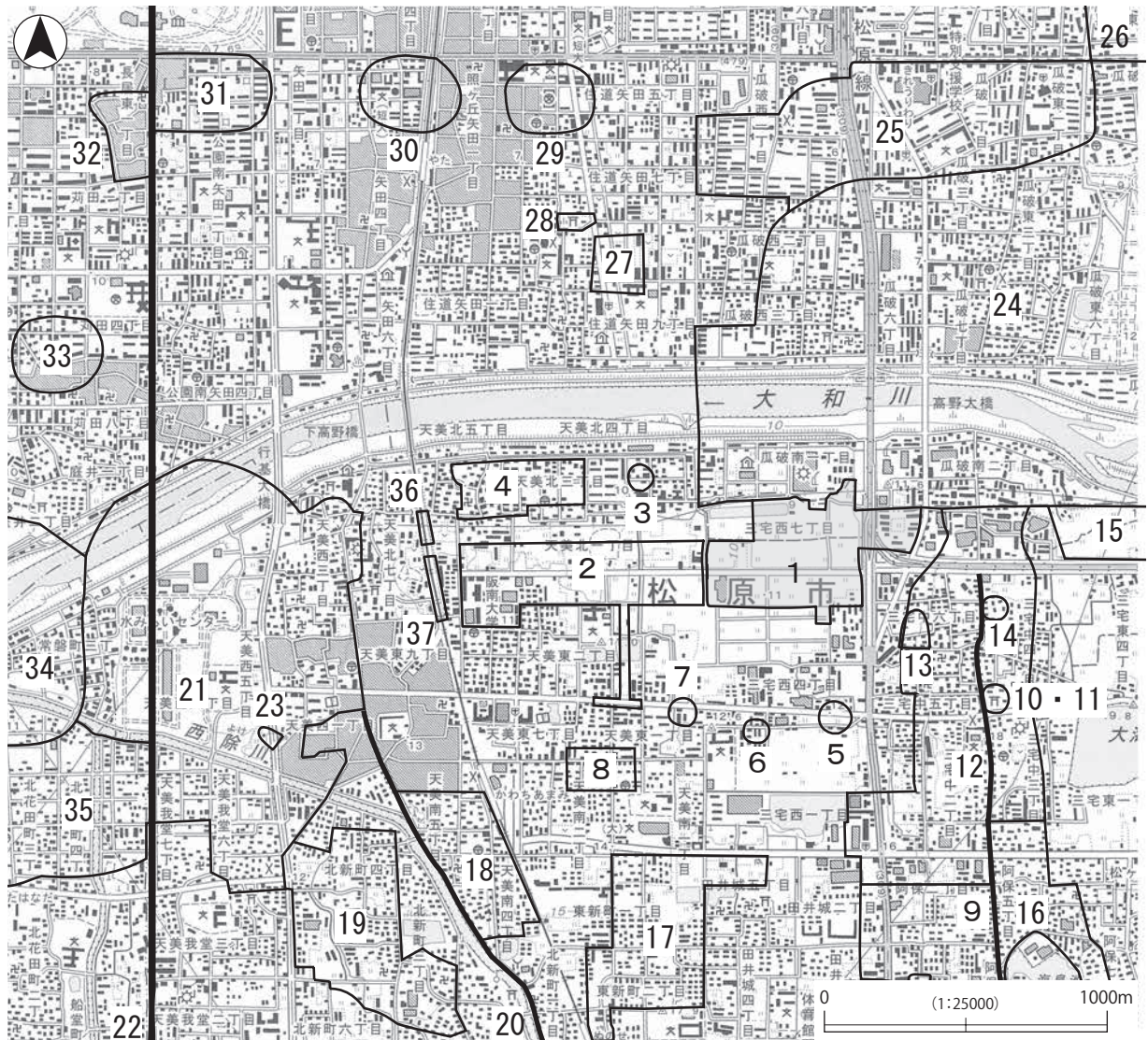
この地域で最も著名で、調査例が多く実体が比較的是っきりしている遺跡としては、本事業に関わって調査を実施した池内・三宅西遺跡のほか、西方に位置する大和川今池遺跡と北に広がる瓜破遺跡が挙げられる。最近の調査例も多く、これらの既往の調査成果を概観することで、この地域の様相をある程度把握することができる。

大和川今池遺跡は、下水処理場建設に伴う発掘調査や高規格堤防に関連する調査が数次にわたって行われ、また、今回の調査対象となっている大和川線の路線内についても調査が実施され、伴に多くの成果が挙げられている。この遺跡では、旧石器時代のナイフ形石器に始まり、縄文時代の有舌尖頭器や石器、古墳時代の玉類や韓式系土器・土師器・須恵器、中世の遺物などが出土している。遺構では、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物および古墳、古代～中世の掘立柱建物や井戸・溝などが検出されているほか、古代の官道である「難波大道」の一部もみつまっている。

一方、北に位置する瓜破遺跡は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、東西 0.7 km、南北 0.6 kmに及ぶ範囲を有する。旧大和川流域に展開する河内平野遺跡群の南西端にあたり、東には長原遺跡が

隣接する。瓜破遺跡は現在、地形の特徴と遺構の分布により、西・東北・東南の3地区に区分されている。昭和4(1939)年、瓜破霊園建設に伴って出土した弥生土器が新聞で取り上げられたのを契機に、翌年には山本博氏により大和川河床で採集された弥生土器などの遺物が学会で紹介された。その後、戦前から戦後にかけて今里幾次氏や日本考古学協会による発掘調査が行われた。また、昭和24(1949)年には、採集された中国新代の「貨泉」が誌上で紹介されている。

池内遺跡と三宅西遺跡に隣接する部分は瓜破遺跡西地区にあたり、地形的には瓜破台地の西側斜面とさらに西に広がる平野部に位置しており、多くの成果が得られている。既往の調査で、約6300年前に降下したとされる横大路火山灰層の下から、石器製作跡に伴うと考えられるサヌカイトのチップが検出さ



- 1 : 三宅西遺跡 2 : 池内遺跡 3 : 城連寺東遺跡 4 : 城連寺遺跡 5 : 三宅西4丁目遺跡 6 : 田池下遺跡
- 7 : 天美東1丁目遺跡 8 : 天美南遺跡 9 : 中高野街道 10 : 屯倉神社 11 : 三宅城(三宅砦)跡推定地 12 : 三宅遺跡
- 13 : 権現山古墳跡 14 : 三宅古墳跡 15 : 三宅東遺跡 16 : 阿保遺跡 17 : 東新町遺跡 18 : 堀遺跡 19 : 高木遺跡
- 20 : 下高野街道 21 : 大和川今池遺跡 22 : 難波大道跡 23 : 狐塚古墳跡 24 : 瓜破遺跡 25 : 瓜破北遺跡 26 : 喜連東遺跡
- 27 : 住道寺跡 28 : 中臣須牟知神社境内遺跡 29 : 照ヶ丘矢田遺跡 30 : 矢田2丁目遺跡 31 : 矢田部遺跡 32 : 新城城跡伝承地
- 33 : 苜田4丁目所在遺跡 34 : 依羅池跡 35 : 北花田遺跡 36 : 天美北六丁目北遺跡 37 : 天美北六丁目南遺跡

図4 三宅西遺跡周辺の遺跡分布図 [国土地理院 1:25000「古市」・「大阪東南部」平成14年を元に作図]

れることから、古くは後期旧石器時代まで遡るものとみられている。また、縄文時代中期から晩期にかけての土器や石器が、自然流路より纏まって出土しており、集落の存在の可能性が指摘されている。平野部では、晩期に堆積作用が活発化することが知られており、水成層からは多くの突帯文土器の破片が出土するほか、西地区南半部に弥生時代の集落の纏まりがあることが知られている。集落域の中心は、現在の大和川の位置にあたり、前期から後期まで継続すると考えられている。近年では大和川以南にも調査がおよび、三宅西遺跡に隣接する部分の調査区で、弥生時代中期前葉の居住域や墓域が確認されている。これに対し、古墳時代の遺構や遺物はほとんど検出されていない。また、古代に関しても遺物は散見されるが、纏まった遺構は検出されていない。中近世は、全体で耕作土層が確認されており、島畠や耕作溝が多くみついている。

なお、今回の調査地を含む、三宅集落から大和川今池遺跡付近にかけての地域は、条里地割が明瞭に残る場所として知られている。特に、昭和55(1980)年に行われた大和川今池遺跡の調査の際に、初めて「難波大道」が確認されたことから、周辺の古道の検討と共に条里制についての研究が進んだ。大和川今池遺跡を中心とした条里地割に関しては、岸俊男氏をはじめとして、足利健亮氏や金田章裕氏などの研究がある。岸氏は、古道の比定や道の設定規格について検討を行っており、その後の古道や条里の研究に大きな影響を与えた。足利氏は、古道の間隔の検討から距離単位における時期を比定し、大津道や丹比道の斜行道路の痕跡を復元した上で、条里の検討を行った。また、金田氏は、古道と条里地割の関係について、古道を中心とした条里地割の不規則な規格を、古道設定から条里地割設定、道路耕地化へと続くプロセスとして捉え、検討を行った。

さらに、発掘調査で「難波大道」がより正確に検出されたため、考古学的な観点からも検討が行なわれることとなった。古代史や地理学の既往の調査成果をふまえて、条里や「難波大道」の設営時期についての検討がなされているが、同時に条里地割の導入時期の問題に焦点が絞られるようになり、集落と土地利用の構造的把握が重要な検討課題となっている。

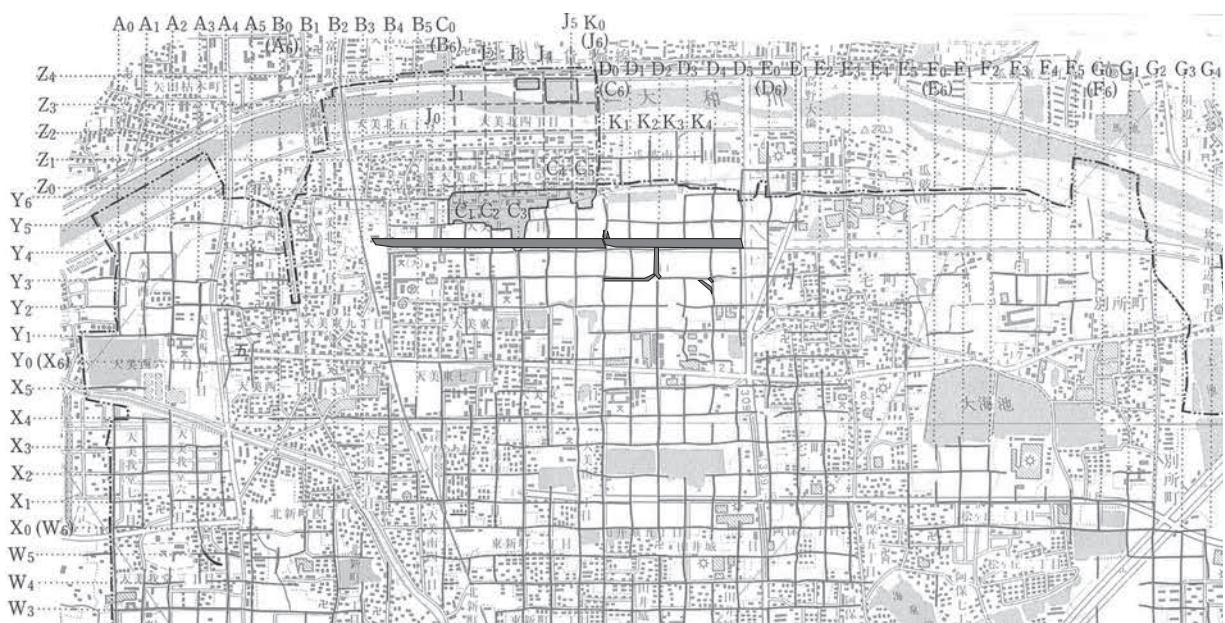


図5 三宅西遺跡周辺の条里地割図〔足利1985を元に作成〕

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 現地調査

発掘調査の実施にあたっては、2003年刊行の『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』にしたがって行った。以下、現地での調査において用いた調査の手法について述べる。

調査箇所の呼称については、受託年度（西暦下2桁）－発注番号（発注順）を組合わせて表記する原則に基づき、第Ⅰ章で述べたように09－2 調査と呼称し、必要に応じて09－2－1～5までの各トレンチ名を付した。

遺構名については、調査を通じて遺構の形状に関わらず、「1 溝、2 土坑…」のように固有の通し番号を付与した。以下の報告においても現地調査時に付与した番号を踏襲する。なお、掘立柱建物のように、複数の遺構で構成される遺構については、「遺構種類－番号」の表記とし、他の遺構と区別した。

調査地の地区割は、世界測地系の国土座標軸に準拠したもので、大阪府が位置する国土座標軸の第Ⅵ座標系をもとに、第Ⅰ～Ⅳ区画に区分している（図6）。これに従うと今回の調査地の第Ⅰ・Ⅱ区画上の位置はいずれもF5－16となる。遺物の取り上げもこの地区割を使用し、区画の最小は10mを単位とする第Ⅳ区画を用いた。

水準は、全国的に共通の基準となっている東京湾平均海水位（T.P.：TOKYO PEIL）を用いる。

遺構面及び遺構・遺物の実測に関しては、必要に応じて個別に手書きによる平・断・立面図を作成した。遺構面については、基本的に縮尺100分の1の平板測量を行い、遺構分布が密な場合や微細な地形復元が必要と判断した場合は、ヘリコプターによる空中写真測量で50分の1の平面図を作成した。

調査時の地層については、各調査区の壁面を用いて把握し、平成15～16年度に実施した確認調査結果に準ずる層準名を付した。

遺構面については、断面観察によって遺構・遺物の存在が予想された土壌化層を基準に、上から順に第1面・第2面…と呼称し、遺構・遺物の粗密を考慮しつつ必要のある遺構面についての調査を実施した。

第2節 整理作業

現地調査で得た遺物は、土器・石器・木器などを合わせるとコンテナに換算して約7箱を数えた。この中から必要と判断するものについて53点を実測した。また、これらの作業に併行して、報告書刊行後の遺物管理を効率的に行うため、FileMaker社のFileMakerPro8.0を用いて遺物データベースを作成した上で収納を行っている。

なお、本報告書掲載の挿図類のうち、遺構図はスキャニングしてデジタルデータ化した後に、Adobe社のWindows版PhotoshopCS2を用いて図面の合成・調整を行い、同社のIllustratorCS2を用いてトレース作業を行うという手順によって作成している。

このほか、地形の微起伏を表現するための等高線などについては、現地調査で実施した空中写真測量の成果であるデータ図面（DXF形式）を、AutoDesk社のAutoCad LT2007を用いて簡単な加工を施した後、Illustrator上において加工・調整を施して最終的な図面として用いている。

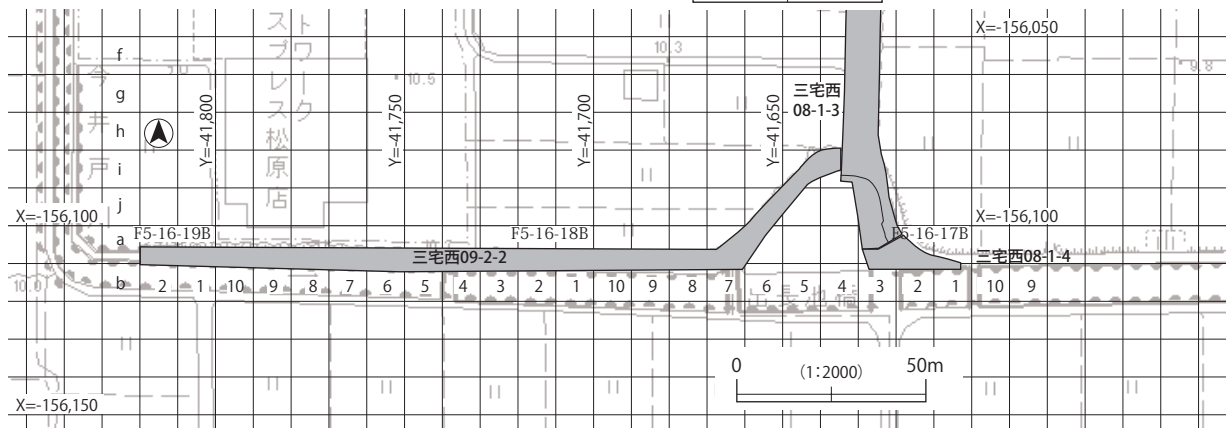
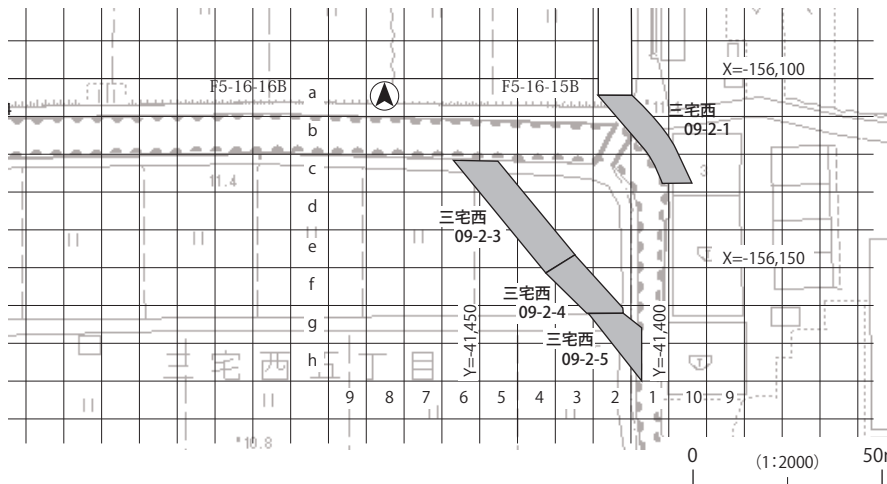
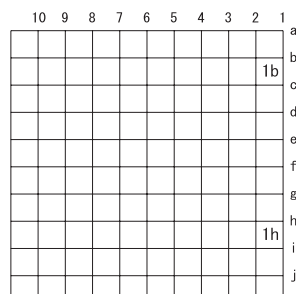
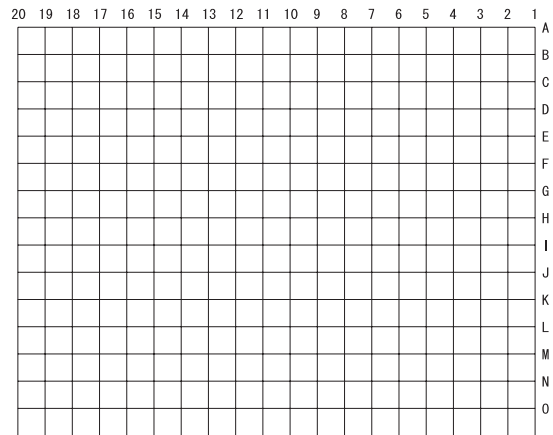
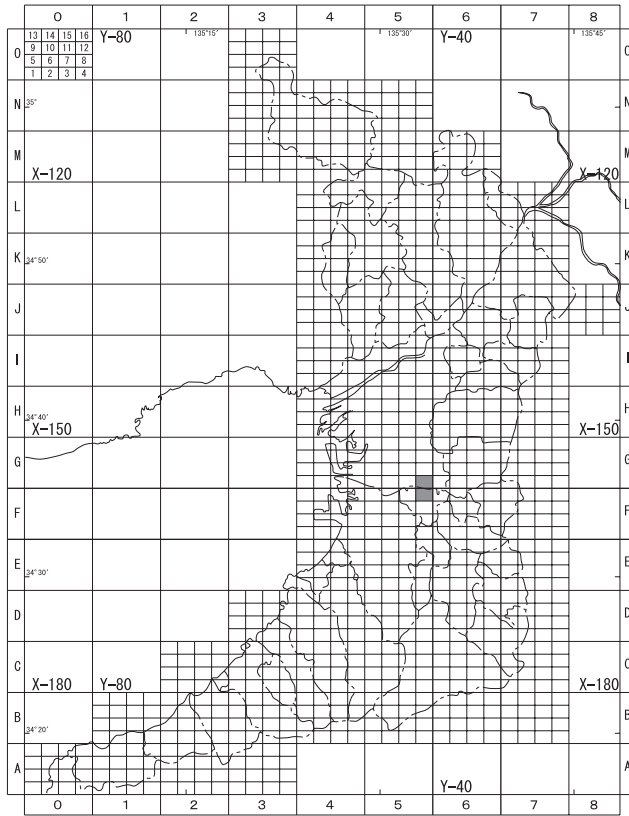


図 6 調査区の配置と地区割

第IV章 調査の成果

第1節 3～5区の調査成果

1. 基本層序（図7 図版1）

3～5区は、三宅西遺跡の東南端に位置する調査区である。現地表面の標高は10m前後を測る。調査は現代耕作土層である第1層まで、バックホーによる掘削を行い、以下の地層については、人力によって一層ずつこれを除去し、遺構面の検出に努めた。遺構面については、調査区付近で行われている既往の調査成果に従い、第1面（第3層下面）、第2面（第7a層下面）、第3面（第7e層下面）、第4面（第9層上面）の合計4面の遺構面について平面調査を実施した。以下に3～5区における堆積地層の概要を述べる。なお、地層の確認については、調査区の東側壁面を用いて行い、図7に掲げた。

第1層 現代耕作土層である。平均層厚 0.1 mを測る。機械掘削対象層である。

第2層 にぶい黄色を呈する極細砂～細砂を主体とする耕作土層である。本層以下を人力掘削の対象として調査を行った。層厚は 0.2～0.3 mを測り、南側ではほとんど残存しない。堆積が厚く見られる箇所では、5層程度に層理面が認められることから細分が可能であり、複数回の耕作が行われた結果の堆積物と目される。耕作土であることを反映したものか、遺物の出土はほとんど認められないが、層下部から13～14世紀代とみられる瓦器碗の細片が出土したほか、上部から瓦質土器などが出土したことから中世後期以後に形成された層と考えられる。

第3層 灰黄色の砂質シルトを主体とする耕作土層である。層厚 0.1 mを測り、調査区ほぼ全域に均質に分布する。遺物は瓦器碗の細片が認められたことから、中世前期に形成された層と考えられる。

第7a層 黄褐色～暗灰黄色の粗砂混じり砂質シルトの土壌層である。層厚は 0.3 m前後を測る。調査区北半分では下位層の第5層との間に2回程度の粗砂～極粗砂を主体とする水成層（第7b・7d層）を間に挟んでおり、南側ではそれらの層が収斂する様子を確認した。

遺物は古墳時代～平安時代と考えられる須恵器片を含むほか、下部には、弥生時代後期の土器も含まれていることから、弥生時代後期以後、古墳時代～平安時代までに形成された層と考えられる。

第7e層 黒褐色の砂質シルトを主体とし、下位の第8層を母材とする土壌層である。層厚は 0.2 m前後を測る。極粗砂の堆積物を多く含む。暗色味が強く、淘汰は上位の第7a層と比較して悪い。調査区のほぼ全域に均質に分布する。遺物は少量ながら弥生時代後期の土器片を含んでいることから、弥生時代に形成された層と考えられる。

第8層 暗灰黄色の中砂を主体とする水成層である。層厚は 0.2 m前後を測る。北側では淘汰が悪く、粗粒の堆積物が主体となるが、南側では細粒化する傾向にある。調査区のほぼ全域に分布する。

遺物は認められないが、層相や前後の層の年代観から縄文時代後期～晩期にかけて形成された層と考えられる。

第9層 黒褐色粘質シルトの土壌層である。下位の第10層を母材としている。暗色味が強く、淘汰は良い。層厚は 0.1 m前後を測る。調査区ほぼ全域に分布する。遺物は認められなかったが、層相や前後の層の年代観から縄文時代後期～晩期にかけて形成された層と考えられる。

第10層 暗灰黄色砂質シルトの水成層である。層厚は0.08mを測る。遺物は認められなかったが、層相

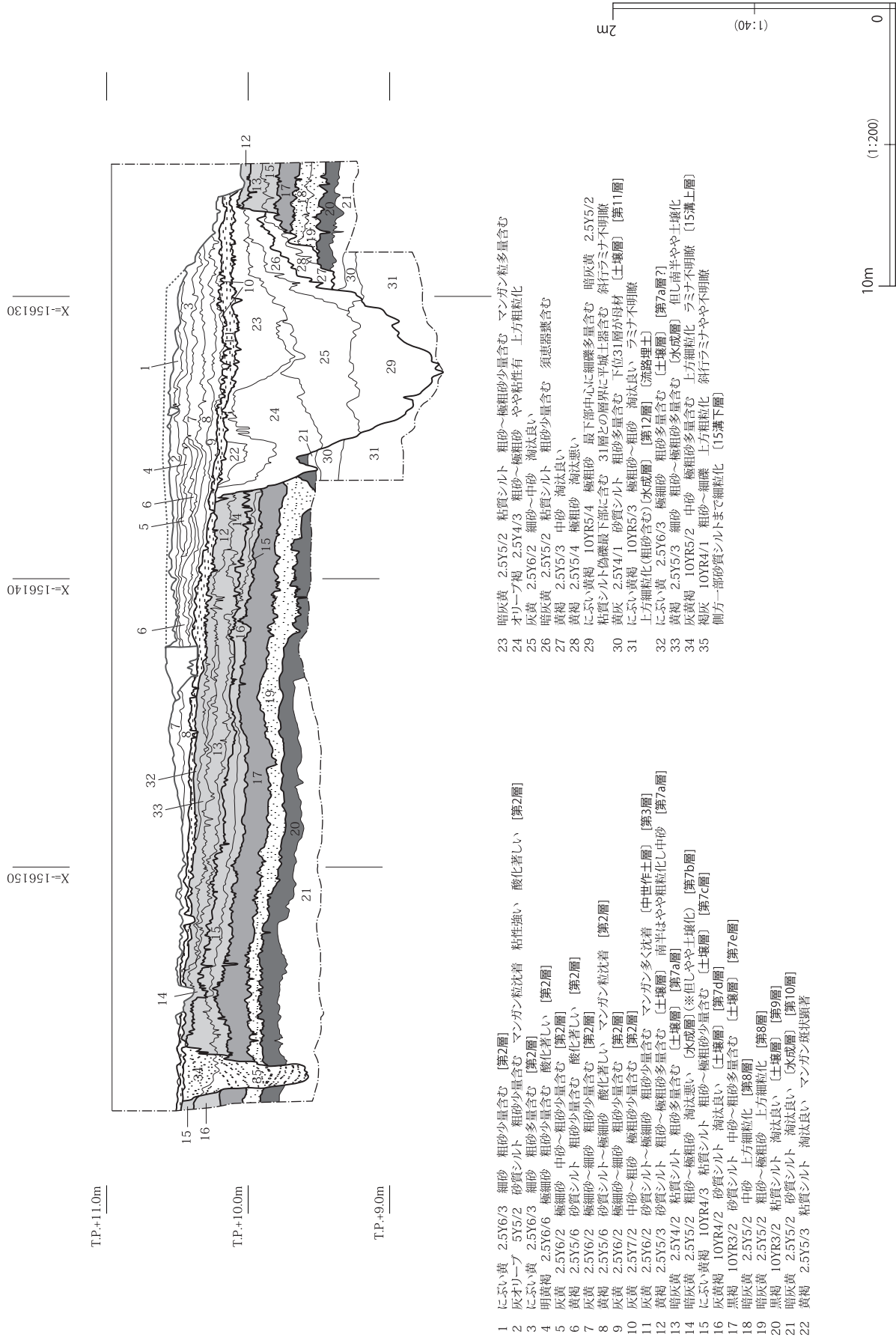


図7 3・4区 東壁面 断面図

- 1 にぶい黄 2.5Y6/3 細砂 粗砂少量含む [第2層]
- 2 灰オリーブ 5Y5/2 砂質シルト 粗砂少量含む [第2層]
- 3 にぶい黄 2.5Y6/3 細砂 粗砂少量含む [第2層]
- 4 明黄褐 2.5Y6/6 極細砂 粗砂少量含む [第2層]
- 5 灰黄 2.5Y6/2 中砂～粗砂少量含む [第2層]
- 6 灰黄 2.5Y6/6 砂質シルト 粗砂少量含む 酸化著しい [第2層]
- 7 灰黄 2.5Y6/2 砂質シルト 粗砂少量含む 酸化著しい [第2層]
- 8 黄褐 2.5Y5/6 砂質シルト～極細砂 酸化著しい、マンガング粒沈着 [第2層]
- 9 灰黄 2.5Y6/2 極細砂～細砂 粗砂少量含む [第2層]
- 10 灰黄 2.5Y7/2 中砂～粗砂 極細砂少量含む [第2層]
- 11 灰黄 2.5Y6/2 砂質シルト～極細砂 粗砂少量含む マンガン多く沈着 (中世作土層) [第3層]
- 12 黄褐 2.5Y5/3 砂質シルト 粗砂～極粗砂少量含む (土壌層) 南半はやや粗粒化し中砂 [第7a層]
- 13 暗灰黄 2.5Y4/2 粘質シルト 粗砂少量含む (土壌層) [第7a層]
- 14 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂～極粗砂 淘汰悪い、(水成層) (※但しやや土壌化) [第7b層]
- 15 にぶい黄褐 10YR4/3 粘質シルト 粗砂～極粗砂少量含む (土壌層) [第7c層]
- 16 灰黄褐 10YR4/2 砂質シルト 淘汰悪い (土壌層) [第7d層]
- 17 黄褐 10YR3/2 砂質シルト 中砂～粗砂少量含む (土壌層) [第7e層]
- 18 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂 上方細粒化 [第8層]
- 19 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂～極粗砂 上方細粒化 [第8層]
- 20 黒褐 10YR3/2 粘質シルト 淘汰悪い (土壌層) [第9層]
- 21 暗灰黄 2.5Y5/2 砂質シルト 淘汰悪い (水成層) [第10層]
- 22 黄褐 2.5Y5/3 粘質シルト 淘汰悪い、マンガング粒状顕著

- 23 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂～極粗砂少量含む マンガン粒多量含む
- 24 オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂～極粗砂 やや粘性有 上方粗粒化
- 25 灰黄 2.5Y6/2 細砂～中砂 淘汰悪い
- 26 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂少量含む 須臾器裏含む
- 27 黄褐 2.5Y5/3 中砂 淘汰悪い
- 28 黄褐 2.5Y5/4 極粗砂 淘汰悪い
- 29 粘質シルト礫層最下部を含む 31層との厚界に平城土器含む 斜行ラミナ不明瞭
- 30 黄灰 2.5Y4/1 砂質シルト 粗砂多量含む 下位31層が母材 (土壌層) [第11層]
- 31 にぶい黄褐 10YR5/3 極粗砂～粗砂 淘汰悪い、ラミナ不明瞭 上方細粒化(粗砂含む) [第12層] (流路埋土)
- 32 にぶい黄 2.5Y6/3 極細砂 粗砂少量含む (土壌層) [第7a層?]
- 33 黄褐 2.5Y5/3 細砂 粗砂～極粗砂多量含む (水成層) (但し南半はやや土壌化)
- 34 灰黄褐 10YR5/2 中砂 極粗砂多量含む 上方細粒化 ラミナ不明瞭 (15溝上層)
- 35 褐灰 10YR4/1 粗砂～細粒 上方粗粒化 斜行ラミナやや不明瞭 側方一部砂質シルトまで細粒化 (15溝下層)

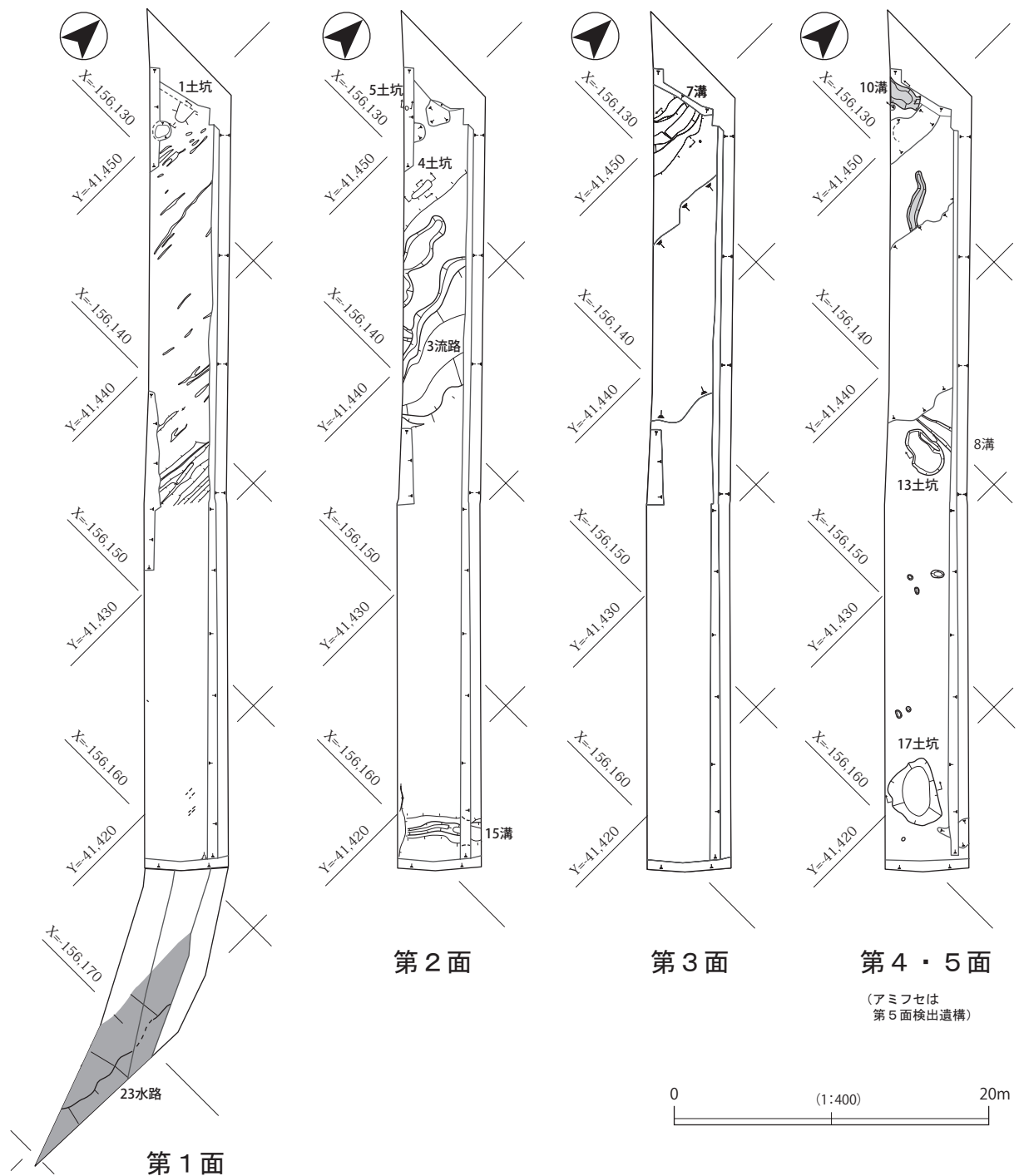


図8 3～5区 各面 平面図

から、本面に帰属させることが妥当であると判断した。土坑の規模は直径 0.5 m、検出面から坑底までの深さは 0.4 m を測る。埋土は淘汰の良い粘質シルトであり、埋土中からは 8 世紀の土師器皿(21)のほか、坑底に貼り付くようにして 9～10 世紀の須恵器甕の体部片(22)が出土した。なお、本土坑の直上には後世の新しい杭痕跡が重複していた。

〔15溝〕(図8・11 図版5-4) 15溝は調査区南端部で検出した幅 1.6～2.0 m を測る溝である。検出面からの深さは 0.2～0.7 m と幅があり、東側が深く西側が浅い。埋土は上下 2 層に分けられ、上層は細砂～中砂を主体とする細粒の堆積物で、下層は極粗砂～細礫を主体とする粗粒の堆積物である。ラミナは顕著には認められないが、溝底の比高差が著しいことから、人為のものとは想定しにくく、破堤堆

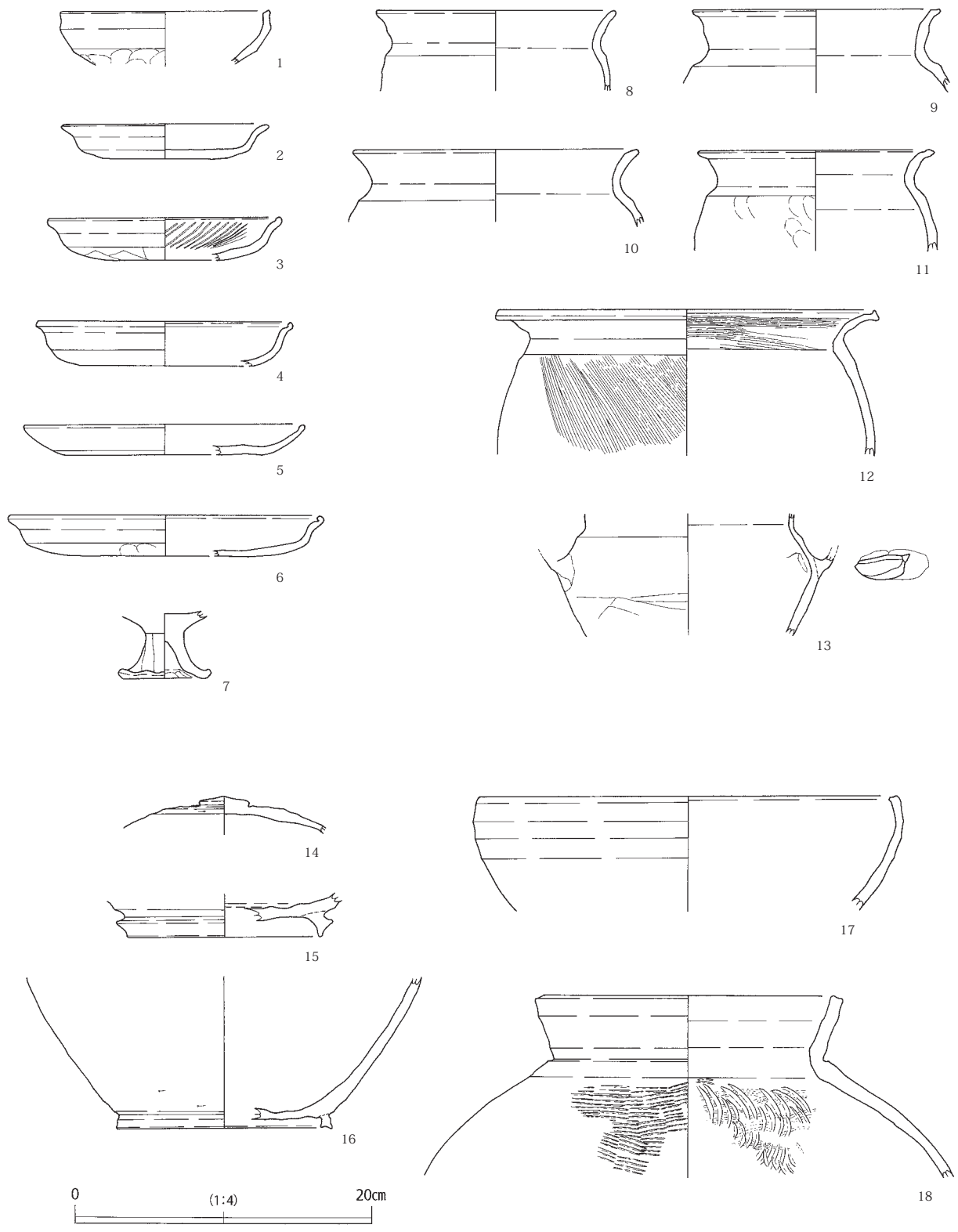


図9 3～5区 第2面 3流路 出土遺物

積物のような性格のものであったかもしれない。遺物は出土しなかった。

〔3流路〕（図8・9 図版5-1～3） 3流路は、北半の調査区の中央部に位置する幅11m、検出面からの深さ 3.5 mの流路である。断面形状は北側については中位で緩やかに段を有する形状を示しており、南側についてはほぼ直線の斜面を成している。埋土は粗砂～極粗砂を主体とする粗粒の堆積物によって構成されており、側方は細砂～砂質シルト程度まで細粒化している。また、中位には側方のプロ

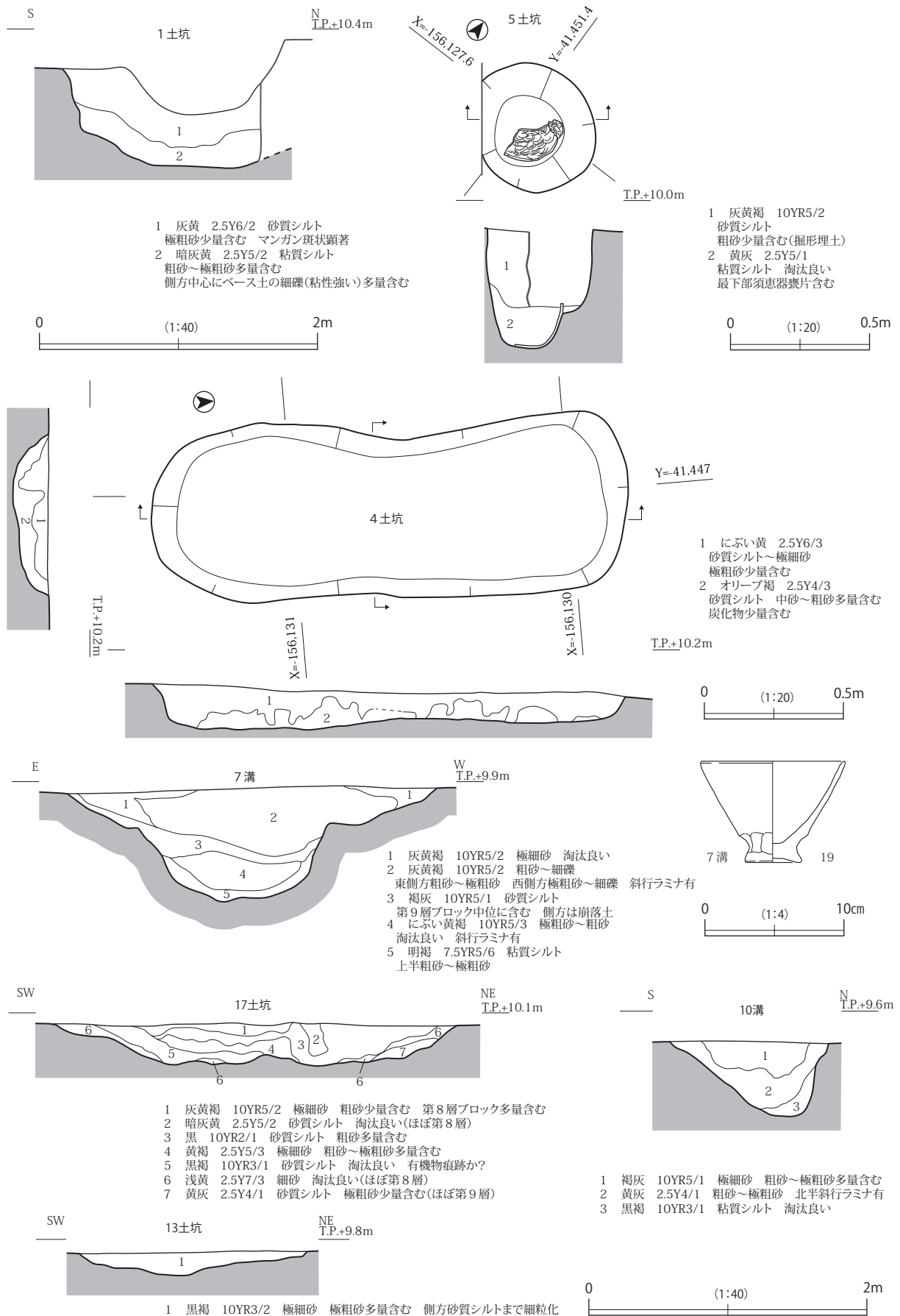


図10 3～5区 第1～5面 各遺構 断面図 出土遺物

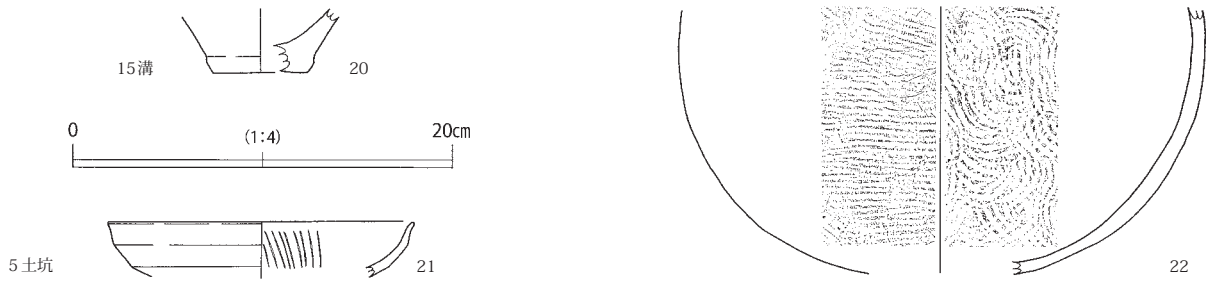


図11 3～5区 第2面 15溝 5土坑 出土遺物

ック土を起源とする粘質シルトの偽礫を多く含み、斜行ラミナが顕著に認められるなど、流速が早いことが想定できる。遺物は埋土下部の肩付近を中心にコンテナ半箱程度出土しており、その内容は平城Ⅲ～Ⅳの遺物が主体をなすことから、既往の調査では三宅西遺跡18区の2002流路、もしくは2003流路〔(財)大阪府文化財センター 2009〕の上流部分に相当すると考えて良い。

以上、第2面から出土した各遺構は、奈良時代～平安時代を中心とする時期に人間活動の痕跡が認められ、そのエリアは3流路を境に西側において密度が濃くなっていることを確認した。

4. 第3面 (図8 図版6-1・2)

第7b～d層を除去した面を第3面として調査した。遺構面の標高は、北側で9.8m、南側で10.0mと、その比高差は0.2mを測る。

検出し得た遺構としては、溝が1条である。

〔7溝〕 (図8・10 図版6-3) 7溝は調査区北端部に位置する幅2.8m、検出面からの深さ0.7mの断面摺鉢状の溝である。埋土は大きく2層に分けられ、上層は極粗砂～細礫を主体とする粗粒の堆積物が、下層は粗砂～極粗砂を主体とするやや粗粒の堆積物がそれぞれ堆積していた。なお、上下の層境には、砂質シルト以下の細粒の堆積物が0.05m程度の厚さで認められたことから、埋没過程の中で一定の時期差があることが想定できる。なお、溝の掘形には第6・7層を起源とするベース土が垂れ下がるようにして堆積しており、機能時形成層と考えられる。

遺物は下層から弥生時代後期の鉢(19)が出土したことから、7溝の帰属時期は弥生時代後期と考えることができる。

以上のことから、第3面は縄文時代晩期～弥生時代後期にかけての遺構面と捉えることができ、今回の調査区周辺にあっては、主に弥生時代後期に人間活動の痕跡が認められることが明らかとなった。

5. 第4面 (図8 図版7)

第7e層を除去したベース面を第4面として調査した。遺構面の標高は北側で9.5m、南側で10.0mと、その比高差は0.5mを測る。

検出し得た遺構としては、溝・土坑・小穴がある。

〔土坑〕 (図8・10 図版8-1・2) 土坑は2基を検出した。土坑については径2～4mと、やや

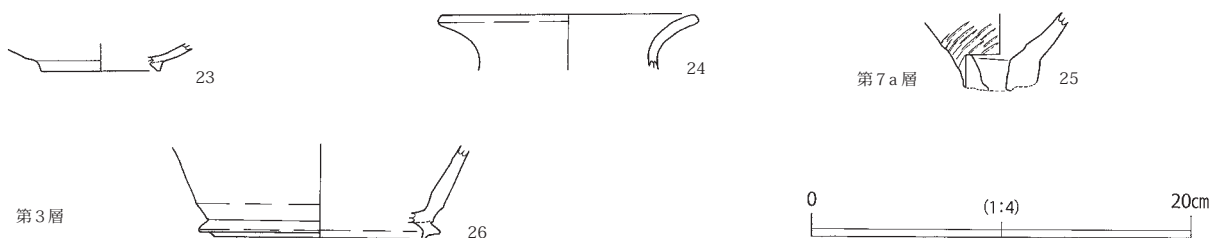


図12 3～5区 各層 出土遺物

大振りなものが多いが、いずれの土坑も平面・断面形状ともに不定形で、埋土と掘形の境界も漸移的で不明瞭であることから落込みや倒木痕といった性格が想定できる。特に、調査区南端で検出した17土坑については、平面形が不整な三角形状を示すことや埋土の堆積状況が黒褐色の粘質シルトの埋土とベースの第8層が反転を起こすなどの点から倒木痕の可能性が高い。遺物はいずれの遺構からも出土しておらず、それぞれの帰属時期は不明といわざるを得ない。

このほかに調査区の中央部付近で8溝、南半を中心に3基の小穴を検出した。いずれも検出面からの深さ0.05m以内、埋土も上位の第5層が入り込むもので、遺物の出土は認められなかった。

以上のように、第3面のベース面として調査を実施したが、本面では明確な人間活動の痕跡を認めることはできなかった。帰属時期は前後の地層の比定時期から縄文時代後期以後と想定できるが、詳細は不明である。

6. 第5面（図8・10 図版8-3）

第8層の水成層を除去した第9層上面を第5面として調査した。なお、本遺構面については、先行して調査を行った北半部に限定して調査を実施し、遺構・遺物の分布が粗であることを確認して以後は周辺での調査成果も加味し、南半部以南では調査を行っていない。遺構面の標高は北側で9.4m、南側で9.6mを測る。

検出した遺構としては10溝など4条の溝が挙げられる。これらの溝はいずれも第6層が内部を充填しており、掘形も不定形であることから、第6層の堆積時に第6層最下部の粗粒の堆積物が旧地表面を削りこんだ滲筋のようなものと捉えることできる。遺物は認められない。

以上のように本面においては明確な人間活動の痕跡を認めることはできなかった。

7. 小結

本調査区では、第1～3面の各遺構面において遺構・遺物を確認できた。

まず、第3面において弥生時代後期の遺物を含む溝を検出したことは、北西側の池内遺跡で弥生時代前期の集落、北側に位置する三宅西遺跡の調査で弥生時代中期の集落がそれぞれ検出されていることから、大きな意義を持つものと考えられる。周辺域では大和川右岸の瓜破遺跡の東北・東南地区〔(財)大阪市文化財協会 2000〕、大和川今池遺跡〔(財)大阪府文化財センター 2009〕の東南部において弥生時代後期の遺構・遺物が確認されている。三宅西遺跡の東南部においてもその広がりを確認できたことは、弥生時代集落の動態を考える上でも重要な資料となる。

また、調査区北半部において検出した平安時代の遺物を含む5土坑や土坑墓の可能性のある4土坑の存在は、周辺域に同時期の集落域が広がる可能性を示すものであり、池内遺跡において検出された同時期の集落域を考える上でも重要な資料と言える。

第2節 1区の調査成果

1. 基本層序（図13 図版9-2、10）

09-2-1調査は三宅西遺跡の東寄り南端に位置しており、既存の河川の北側の護岸壁撤去部分および、コンクリートボックス据え付け部分を調査範囲として実施したものである。

本調査区は、既往の調査の三宅西07-1調査区の南側に位置する。現地表面の標高はT.P.+11mを測る。

調査は、現代耕作土層である第1層までをバックホーによる機械掘削の対象とし、それ以下の地層に

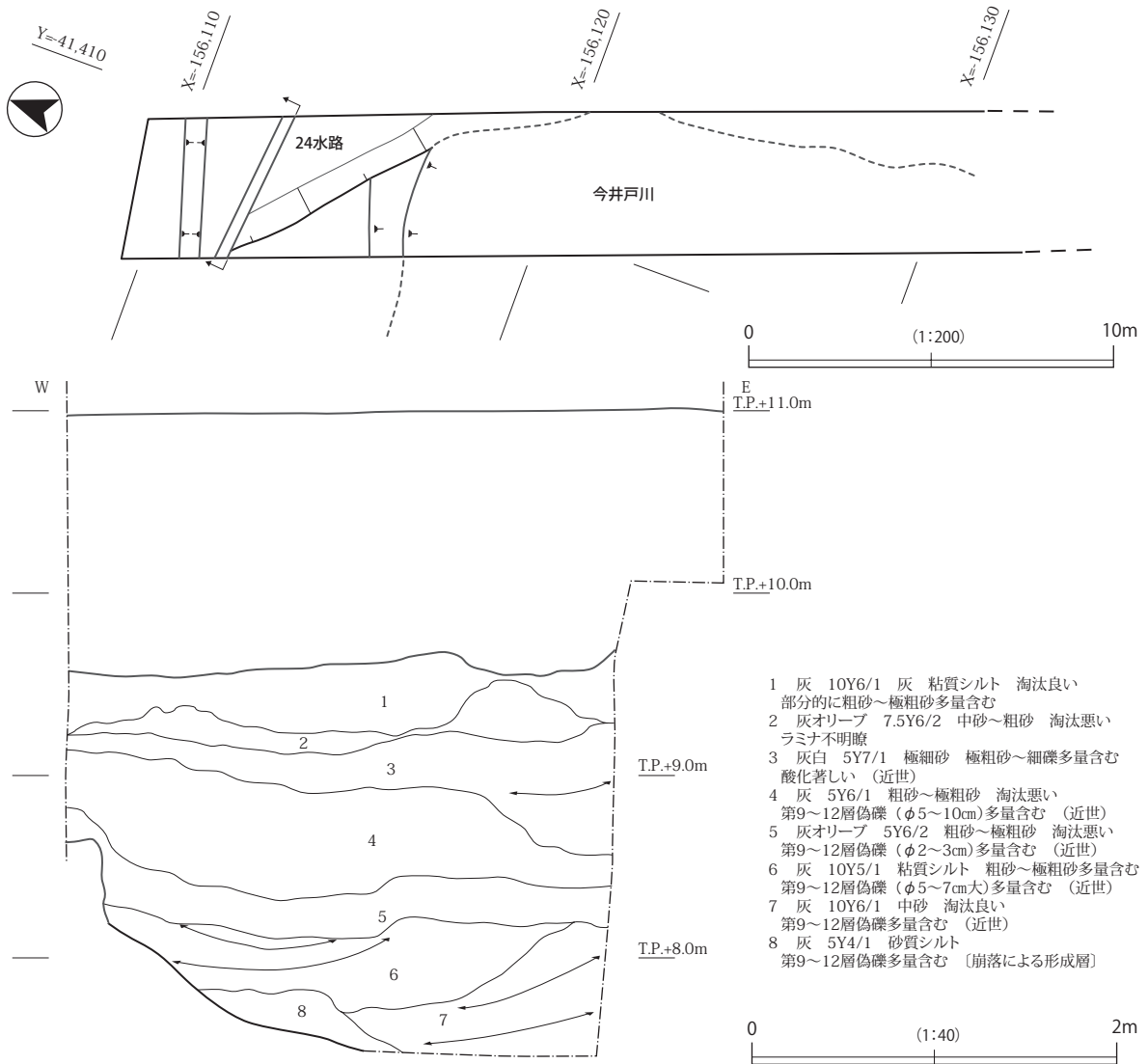


図13 1区 東西断面図・第1面 平面図

については、人力によってこれを除去し、遺構面の検出に努めた。

遺構面については、後述するように本調査区のすべてが中世～近世に形成された水路埋土に相当するため、その他の調査区で確認できた基本層序はほとんど確認できなかった。

2. 第1面 (図13 図版 9-1)

第1層の耕作土層を除去した遺構面を第1面として調査した。本調査区では水路を1条検出した。

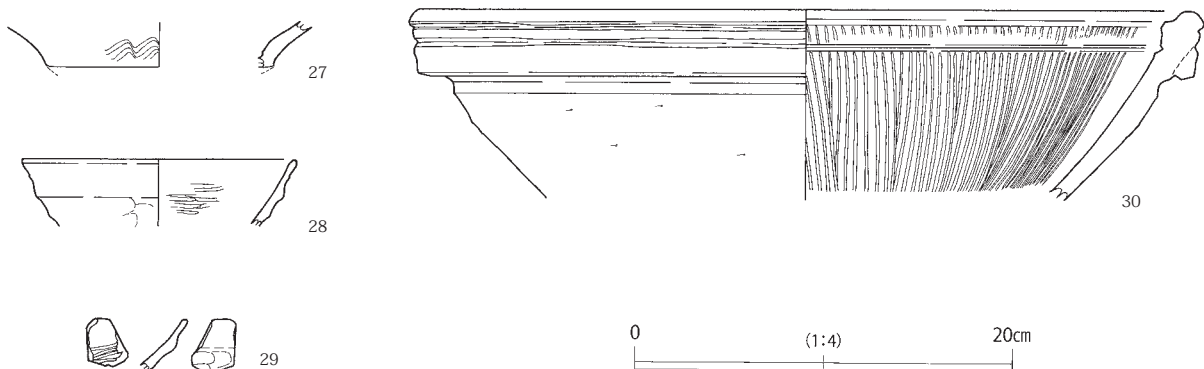


図14 1区 第1面 24水路 出土遺物

〔24水路〕（図13・14） 調査区の全域で検出した。掘形を検出できていないため規模は不明である。深さは、機械掘削終了面から 2.3 mを測る。

埋土は、大きくはブロック土を主体とする人為の埋め戻しに伴う上層と、平行ラミナが顕著に認められる水成層である下層の2層に区分できる。上層は、既往の基本層序でいうところの、第2層最上部を起源とするブロック土を多量に含み、近世の陶磁器が出土することから、近世以後に形成された地層とみることができる。一方、下層の最下部からは、13世紀代の瓦器椀(28)・土師器皿片(29)を確認しており、中世前期に形成された地層と考えることができる。

現今井戸川は、本調査区のほぼ中間地点で西側へ曲折するが、このほかに、増水時には北側へ排水を行うための樋門が設置されていた。本調査区の北側では07-1調査が行われており、南北方向の水路が検出されている。本調査区で検出した水路の延長と考えられ、樋門の存在もこの水路を踏襲したものとの想定も可能である。

3. 小結

本調査区では、現今井戸川の護岸壁の裏込部分のみであったため、掘形の形状を確認することができず、水路の規模を確認することはできなかった。

しかしながら、埋土の最下部で瓦器椀と土師器皿片が出土していることから、24水路の形成時期を窺い知る資料を得ることができた。大きな成果と言えよう。

第3節 2区の調査成果

1. 基本層序（図15 図版10）

2区は三宅西遺跡の東寄り南端、08-1調査の西側に位置し、既存河川の北側のコンクリートボックス据え付け部分、道路敷設部分を調査範囲として実施したものである。

現地表面の標高はT.P.+10.5mを測る。調査は現代耕作土層である第1層までをバックホーによる機械掘削の対象とし、それ以下の地層については、人力によって1層ずつ除去し、遺構面の検出に努めた。

遺構面については、これまでに調査区周辺で行われている既往の調査成果に従い、第1面〔第3層下面(第7a層上面)〕、第2面〔第7e層下面(第8層上面)〕、第3面〔第9層上面(第8層下面)〕の合計3面の遺構面について平面調査を実施した。

以下に2区における堆積地層の概要を述べる。なお、層準の呼称は、既往の調査成果に準じている。

〔第1層〕 現代耕作土である。層厚は約0.15mを測る。

〔第2層〕 近世の耕作土層で黄褐色系の中砂～粗砂を主体とし、淘汰は悪い。層厚は0.15mを測る。

〔第3層〕 中世の耕作土層である。淘汰の良い暗灰黄色の極細砂で、層厚0.05mを測る。

〔第4層〕 周辺の成果から、中世の耕作土層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第5層〕 周辺の成果から、中世の水成層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第6層〕 周辺の成果から平安時代の水成層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第7層〕 第7a層と第7e層の2層に大別できる。地点によっては下位層の第8層の堆積が厚く、第3層による削平が進行しているため、ほとんど残存していない箇所もある。

第7a層は弥生時代後期～平安時代にかけて形成された土壌層である。暗褐色の極細砂を主体とし、淘汰は悪い。層厚0.05～0.15mを測る。

第7e層は弥生時代前期～後期にかけて形成された土壌層である。第8層を母材とするため、地点に

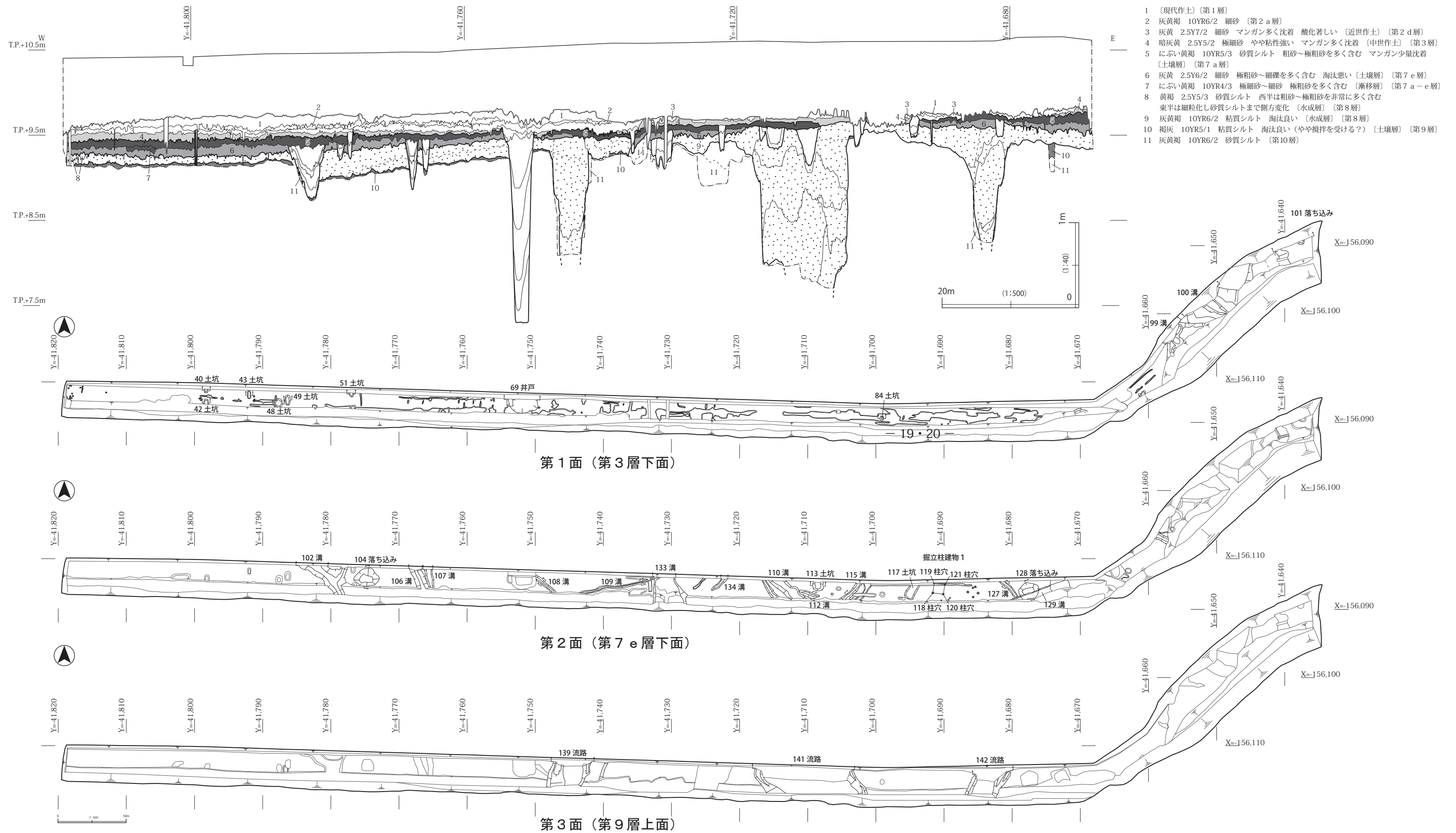


図15 2区 北壁 断面図・各面 平面図

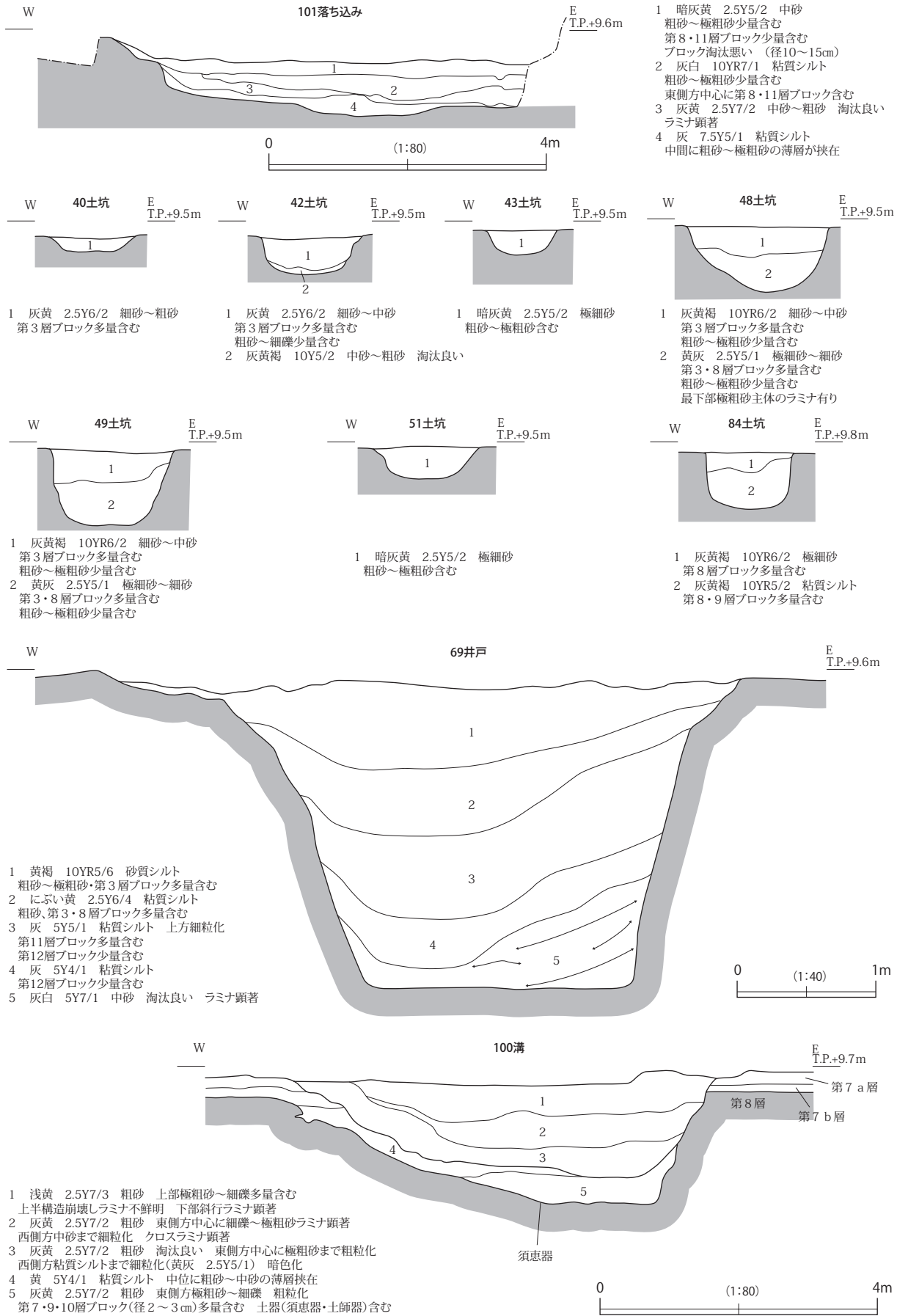


図16 2区 第1面 各遺構 断面図

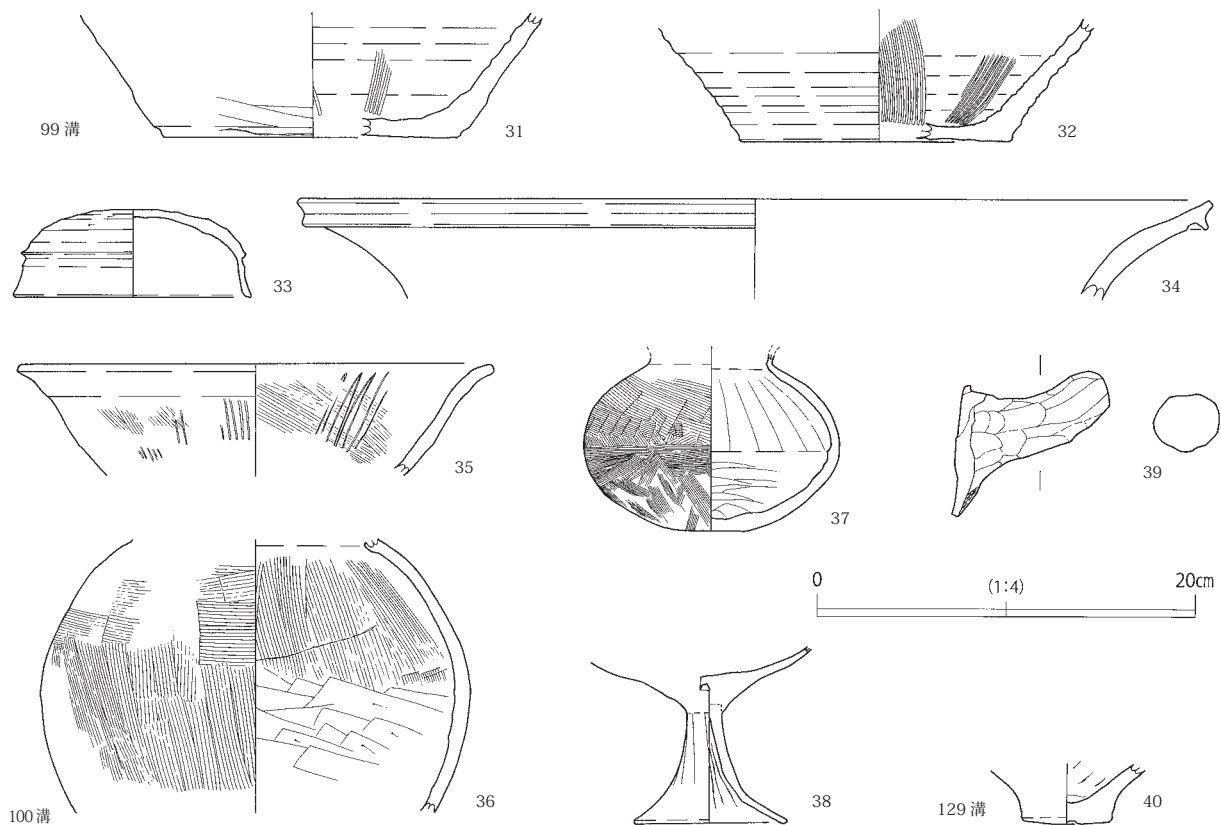


図17 2区 第1・2面 各遺構 出土遺物

よって粒径は異なるが、概ね黄灰色の砂質シルトを主体とする。層厚0.05～0.15 mを測る。

〔第8層〕 縄文時代後期以後に堆積した水成層である。後述する39流路埋土も本層と位置づけることができる。層厚0.1～0.2mを測る。

〔第9層〕 縄文時代後期に形成された土壌層である。本調査区では、間に第9 b層とした水成層を挟在させる。暗灰黄色の砂質シルトを主体とし、淘汰は良い。層厚0.1～0.15 mを測る。

2. 第1面 (図15・16 図版11)

第3層の耕作土を除去した遺構面を第1面として調査した。遺構面の地形は、大きく東が高く、西が低い。なお、08-1調査の西側では、出長池の堤体を確認した。

堤盛土からは、08-1調査同様、近世陶磁器を確認し、出長池の成立年代を考える上で参考となる資料を得ている。

主な検出遺構としては、耕作溝・溝・井戸・土坑・小穴がある。100溝を除いて概ね13～14世紀の所産と考えられる。

〔耕作溝〕 調査区のほぼ全域で確認した。埋土はいずれも第3層を起源とする下面遺構である。東西方向を主体とするものが大半を占め、それに接続する南北方向のものが僅かに認められる。規模は、幅0.2～0.3 mを測る小振りなものと、幅0.8～0.9 mを測る大振りなものの大小2者がある。

〔土坑〕 (図15・16 図版12-3～8) 調査区の西半を中心に、深さ0.4～0.5 m程度の土坑を9基検出している。いずれも第3層起源のブロック土を多く含んでおり、層相は近似している。遺物は出土していない。

〔69井戸〕 (図15・16 図版12-2) 調査区の西側で検出した素掘りの井戸である。北半分は調査区外に及んでいる。平面形状は隅円方形を呈し、規模は幅4.5 m、深さ2.25 mを測る。埋土は第7 a層以

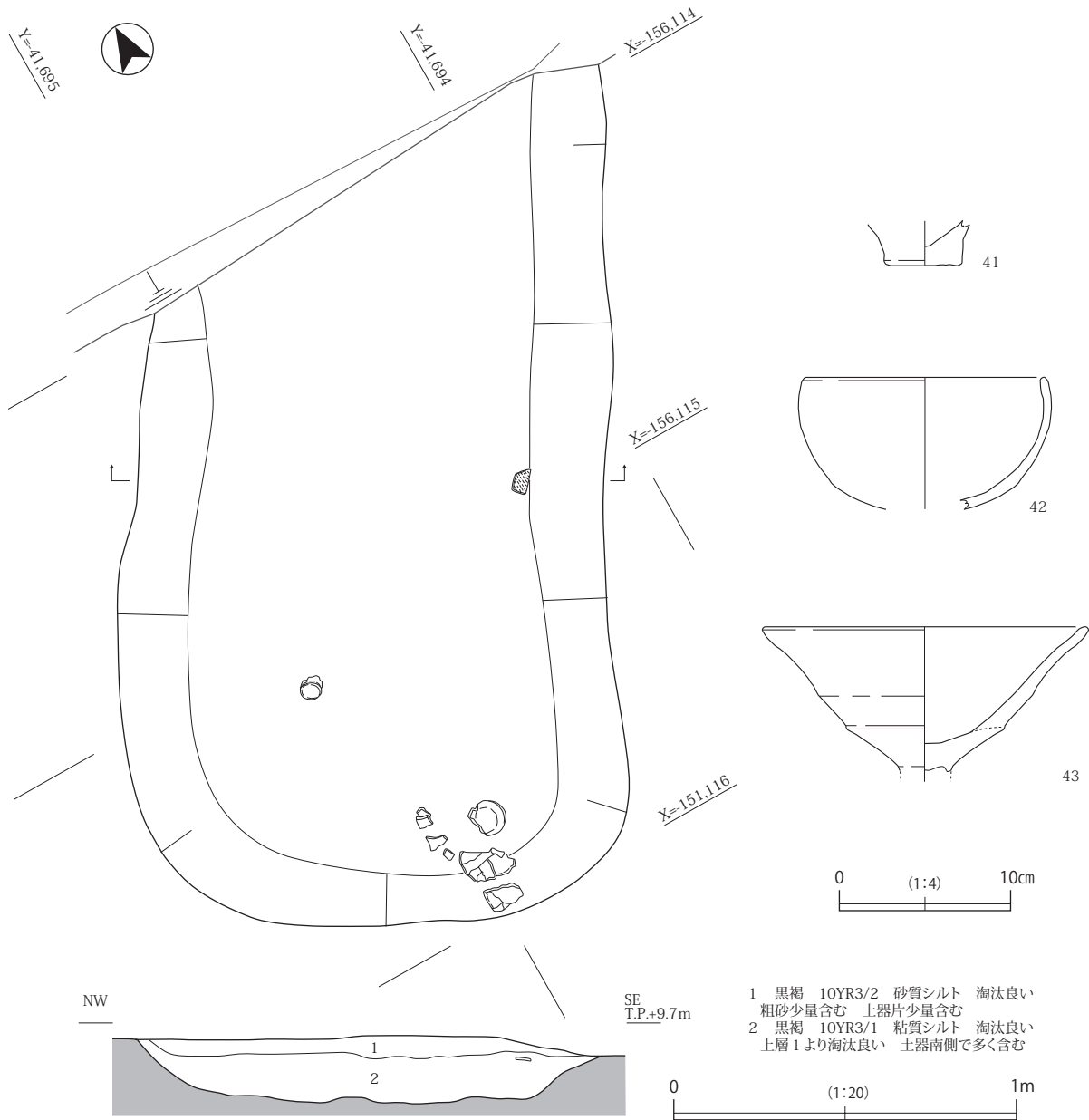


図18 2区 第2面 117土坑 平・断面図 出土遺物

下の地層を起源とするブロック土の集合によって形成されており、埋め戻しによる埋没が想定できる。

遺物は、13世紀代と考えられる瓦器椀片が出土した。

〔100溝〕（図15・16 図版15-1・2、20・21） 調査区の東端で検出した。南東-北西方向の直線的な溝であるが、出長池の攪乱によって検出し得た部分は僅かである。第7 a層から切り込まれていることは明らかであるが、掘形を完全に露出させるには、第7 a・e層を除去する必要があったため、本面と第2面の2回に分けて調査を行った。溝の規模は、幅6m、深さ1.9mを測る。埋土は大きく2層に分けられ、上層・下層ともに、粒径の粗い水成層で構成され、斜行ラミナが顕著に認められる。

遺物は、上・下層から出土しており、土師器直口壺・甕・高杯・鍋、須恵器杯蓋・甕などが出土している。米田編年布留式Ⅲ～Ⅴ期の所産とみられる。溝の示す方向と包含する遺物から、08-1調査の8溝と同じ溝と考えられ、既往の成果の1区3009溝と同一の溝である可能性もある。

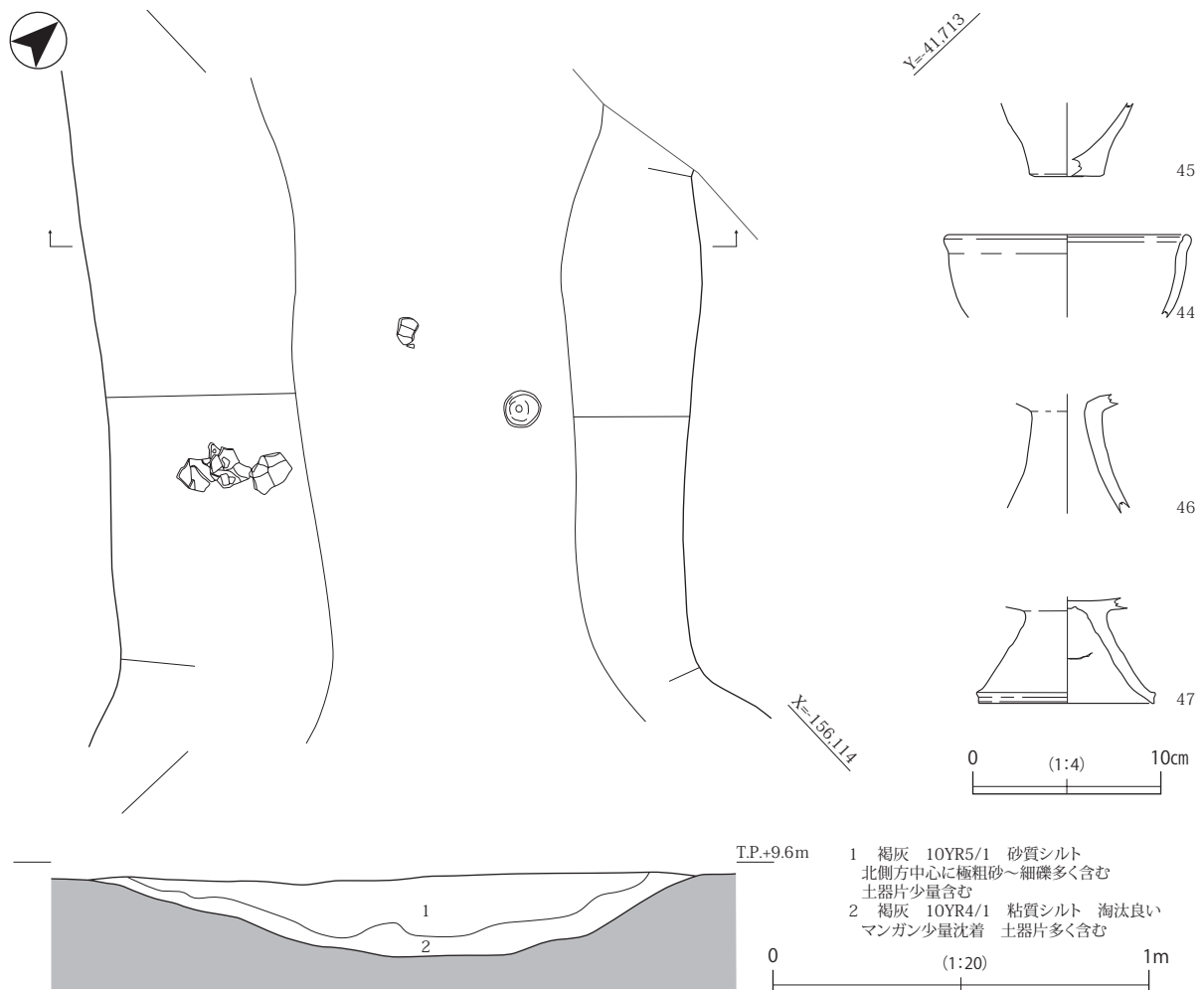


図19 2区 第2面 110溝 平・断面図 出土遺物

3. 第2面 (図15 図版13)

第7 a・7 e層を除去した遺構面を第2面として調査した。遺構面の地形は、第1面同様、東が高く西が低い。主な遺構としては、建物・溝・土坑・落ち込み・小穴がある。

〔掘立柱建物1〕(図15・20 図版14) 調査区東側で検出した。柱穴4基から構成され、さらに北側に延びる可能性もある。柱間間隔は約 1.4 mを測る。第8層の堆積が厚く、第7 a・e層の堆積がほとんど認められない地点に位置しており、第3層による削平が著しいため、竪穴建物であった可能性も捨てきれない。

埋土中からは土師器の細片が出土したのみであるため、詳細な時期は不明であるが、埋土の層相が近似していることから、既往の成果の14区で検出している掘立柱建物群と同時期のものの可能性がある。

〔117土坑〕(図15・18 図版16-1・2) 調査区の東側で検出した。南西-北東方向に軸を有する土坑で、調査区の北側に延びる。規模は、幅 1.4 m、検出面からの深さ 0.2 mを測る。埋土は、淘汰の良い黒褐色砂質シルトで、3層程度に細分できる。

遺物は、掘形に貼り付いて土師器片が出土した。古墳時代後期の所産と考えられる。

〔110溝〕(図15・19 図版15-3・4、21) 調査区のほぼ中央部で検出した南東-北西方向の溝である。北側・南側ともに調査区の外側に延びている。規模は、幅約 1.4 m検出面からの深さ 0.22 mを測る。埋土は褐灰色のシルトを基調とし、粒径と淘汰の差異によって上下2層に区分できる。上層はやや

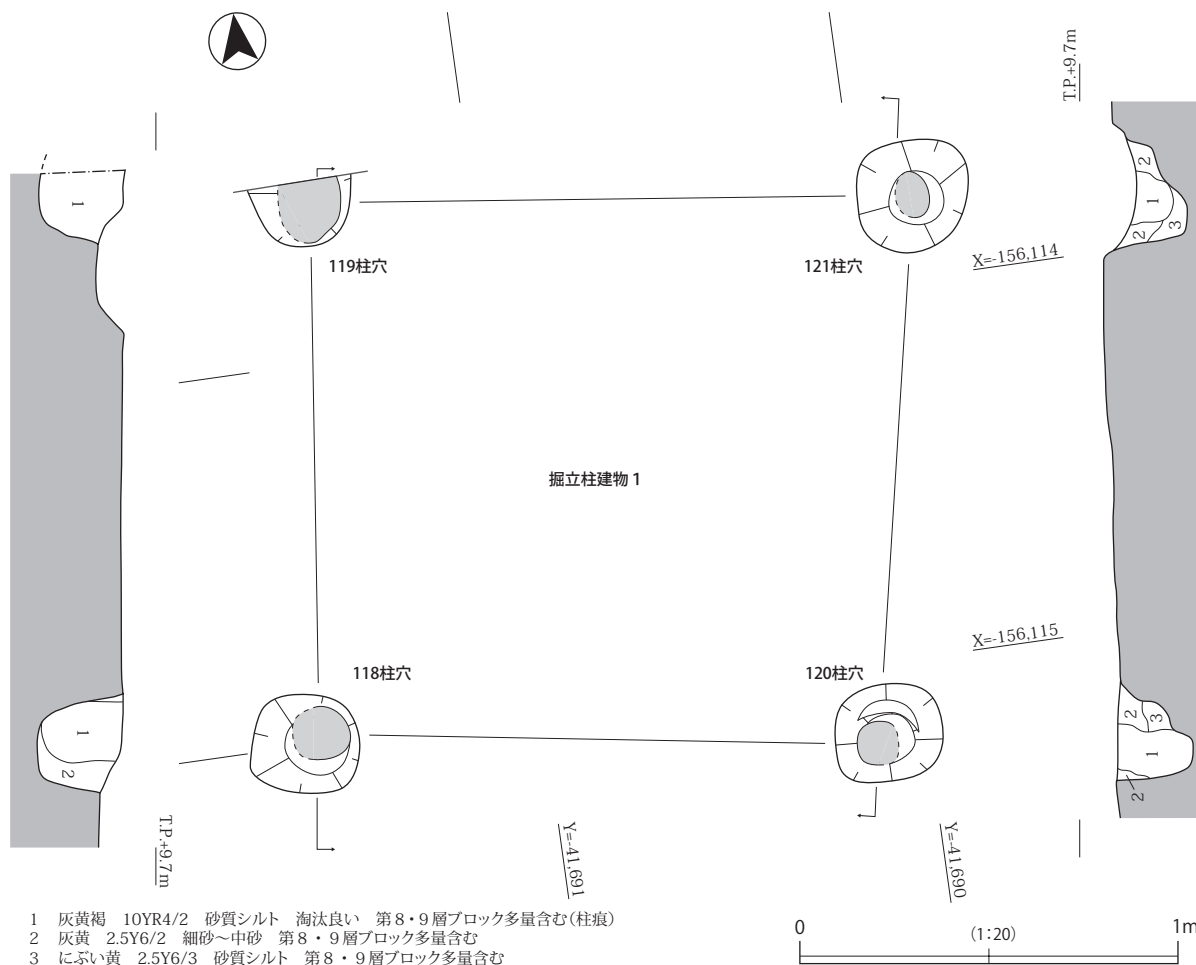


図20 2区 第2面 掘立柱建物1 平・断面図

粗粒化している。遺物は下層中から、土師器鉢片(44)や須恵器高杯の脚部(47)が出土している。古墳時代中期と思われる。

〔落ち込み〕(図15) 調査区全域で、やや散発的に土坑状の落ち込みを検出した。いずれも直径2m前後の不定形な円形の落ち込みで、深さは0.6m前後を測る。埋土と掘形の層界はやや不明瞭で、埋土中に反転が認められることから、倒木痕ないしは、土坑状変形的一种と考えられる。

〔溝〕(図15 図版15) 調査区の西側を中心に溝を検出した。幅2mを測る不定形なものほか、幅0.4mを測るものがあり、前者は自然の堆積、後者は人為に掘削されたものである可能性がある。

4. 第3面(図15 図版17)

第9層の土壤層上面を第3面として調査した。遺構面の地形は起伏に富んでいるが、相対的に西側が高く、東側が低い。主な遺構としては流路を検出した。

〔流路〕(図15・22 図版18) 南北方向の流路を3条検出した。いずれも、本体工事の掘削深度に規制され、東端の流路を除いて完掘できていない。いずれも斜行ラミナが顕著に認められ、上方細粒化する水成層によって充填されている。3条の流路のうち、中央の流路からは縄文土器の可能性のある土器片を確認したが、細片のため、時期は明らかでない。

〔各層出土遺物〕(図23 図版21) 第2～3層と第7a層からは、それぞれ土器が少量出土したが、第7a層から出土した土器は、いずれも細片で、図化し得なかった。

ここでは、第2～3層から出土した土器を掲げる。48は瓦質羽釜の口縁部破片である。49・50は須恵

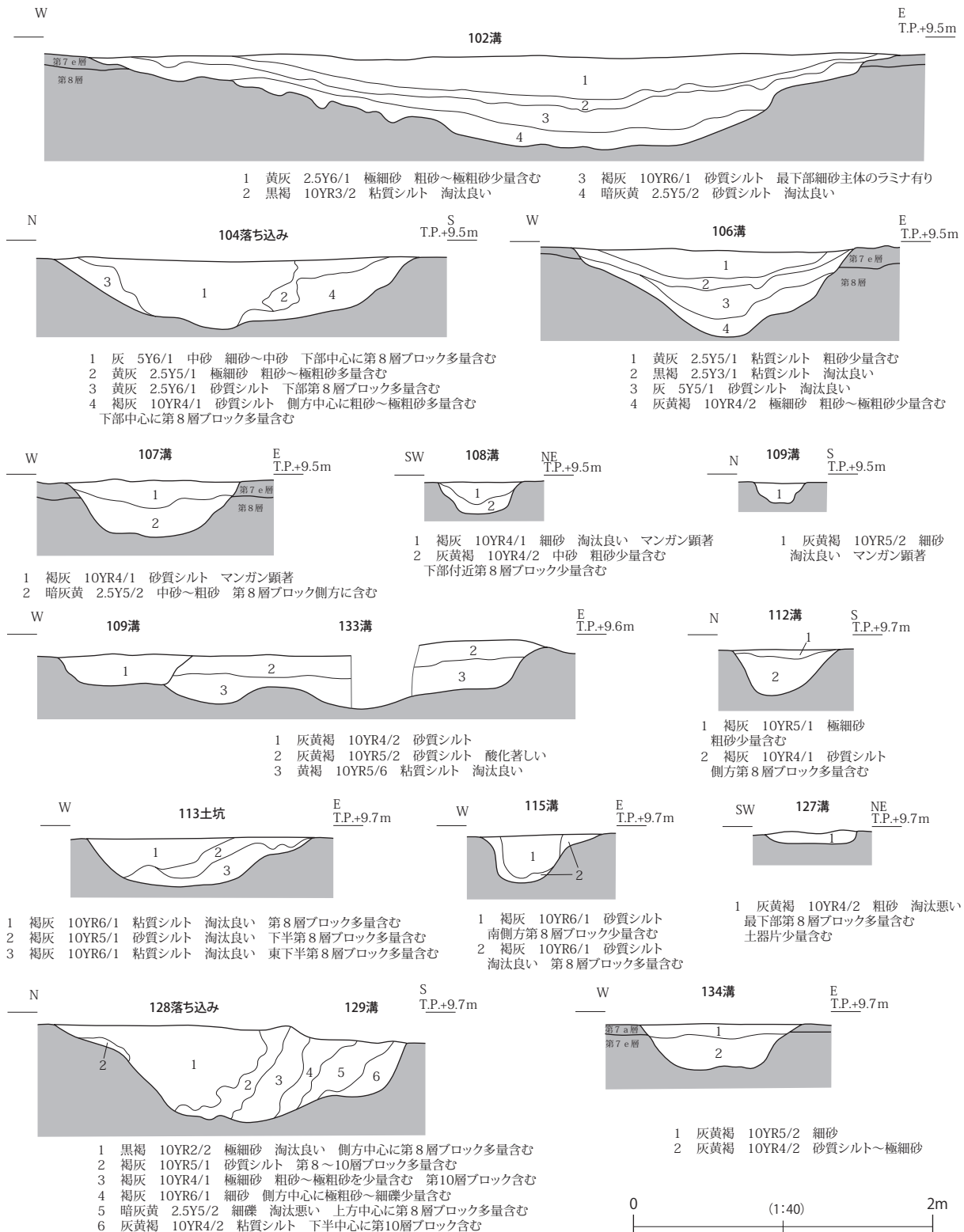


図21 2区 第2面 各遺構 断面図

器捏ね鉢で、後者は片口である。これらは13世紀後半～14世紀代の所産と思われる。

51は須恵器の壺口縁部破片である。54は須恵器甕の口縁部破片である。これらは、古墳時代中期から後期に属すと思われる。

52は小型の土師器壺の体部上半の破片である。53は土師器高杯の脚柱部破片である。これらは、古墳時代前期に属すと考えられる。

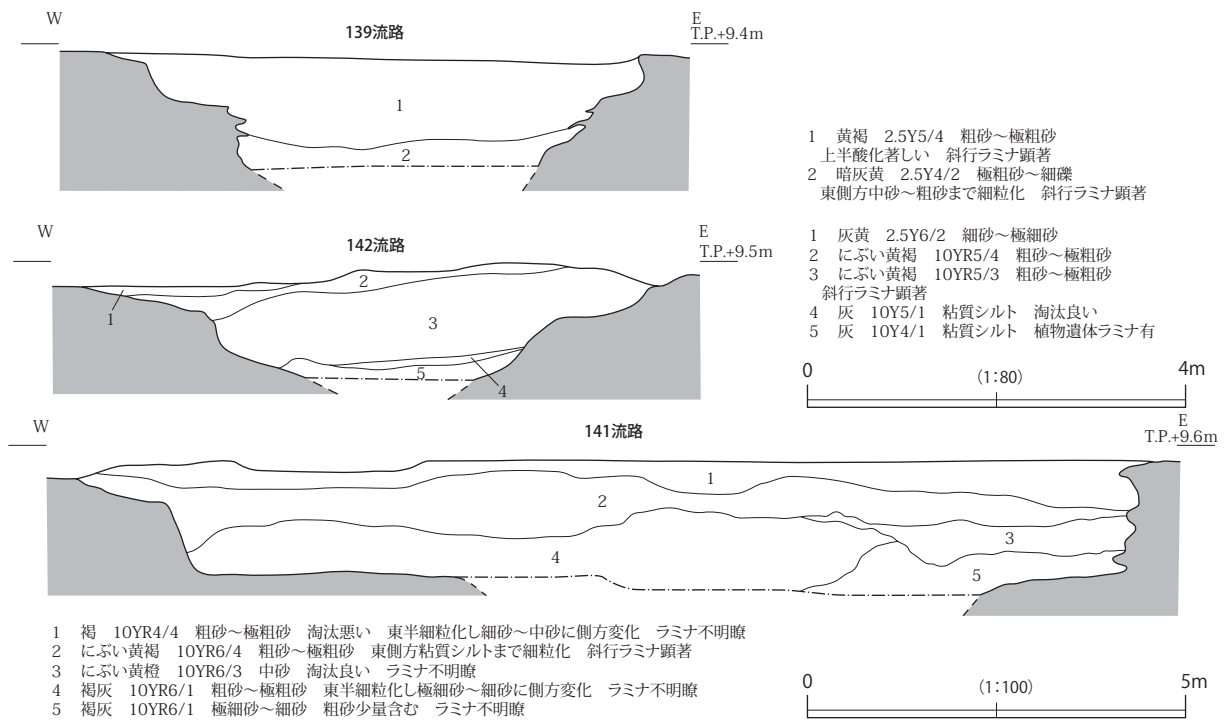


図22 2区 第3面 各遺構 断面図

5. 小結

本調査区は、東西方向に細長い調査区であったために、遺構の全容を把握することが困難な場合が多かった。そうした中、第2面で古墳時代後期建物の可能性のある柱穴を確認したことで、居住域が遺跡の南端である本調査区周辺にも展開することが明らかとなった点で、大きな成果を得たと言える。

本調査は冒頭にも述べたように、諸条件により未調査となっていた地点を対象としているため、いずれの調査区も面積は限定的であった。しかしながら、各調査では、既往の調査の成果を追認する内容ながらも、各時期の遺構・遺物の検出により多くの知見を加えることができた。

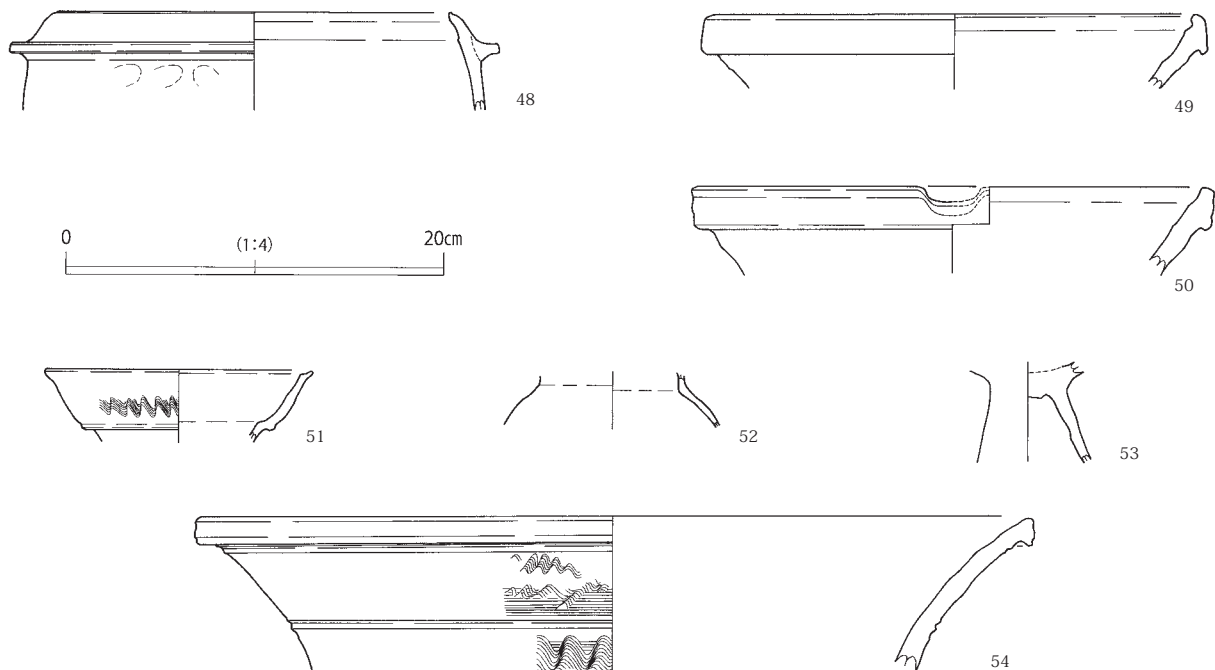


図23 2区 第2～3層 出土遺物

第V章 総括

今回の発掘調査は、2004年度より実施した調査の成果を追認する内容となった。

そこで、本章では発掘調査によって得られたこれらの成果を基に、遺跡の主要成果を各時代を通じて概観することで総括し、本書のまとめとしたい。

なお、当遺跡の個々の主要な成果については、既刊の報告書である『三宅西遺跡』上において、個別の詳細な総括が行われているため、ここでは、あくまでも遺跡全体の概観を行うにとどめる。

第1節 遺跡の構造変遷

〔中世～近世〕(図24)

第1面(第3層下面)で検出できる遺構・遺物の一部が相当する。いずれの調査区でも、ほぼ全域で耕作溝を確認でき、現代まで連綿と続く耕作地としての景観が復元できる。現今井戸川と位置・流向を同じくする09-2-1区23水路の埋土からは、細片ながら13世紀代と考えられる瓦器椀が出土したことから、鎌倉時代以後には基幹となる水路が整備され、灌漑用水路としての機能を果たしていた可能性が高い。これらの基幹水路は、出長池の整備と今井戸川の整備を経て、以後近代に至るまで周辺耕作域の取水源として活用されていた。

〔古代〕(図25)

第2面(第7層下面)で検出できる遺構・遺物の一部が相当する。遺構密度は少ないが、調査範囲の東半を中心に南-北へ流れる流路を検出した。

〔古墳時代〕(図25)

第2面(第7層下面)が相当する。主要な検出遺構としては、前期後半～中期にかけての流路のほか、前期の掘立柱建物・竪穴遺構・井戸・土坑などから構成される居住域とがある。

このうち前者は、南東-北西方向を向く流路(『三宅西遺跡』所収：3009流路・『池内遺跡』所収：8溝・本書所収：100溝)が主要な遺構として挙げられる。この溝からは、埋土の下層を中心に古墳時

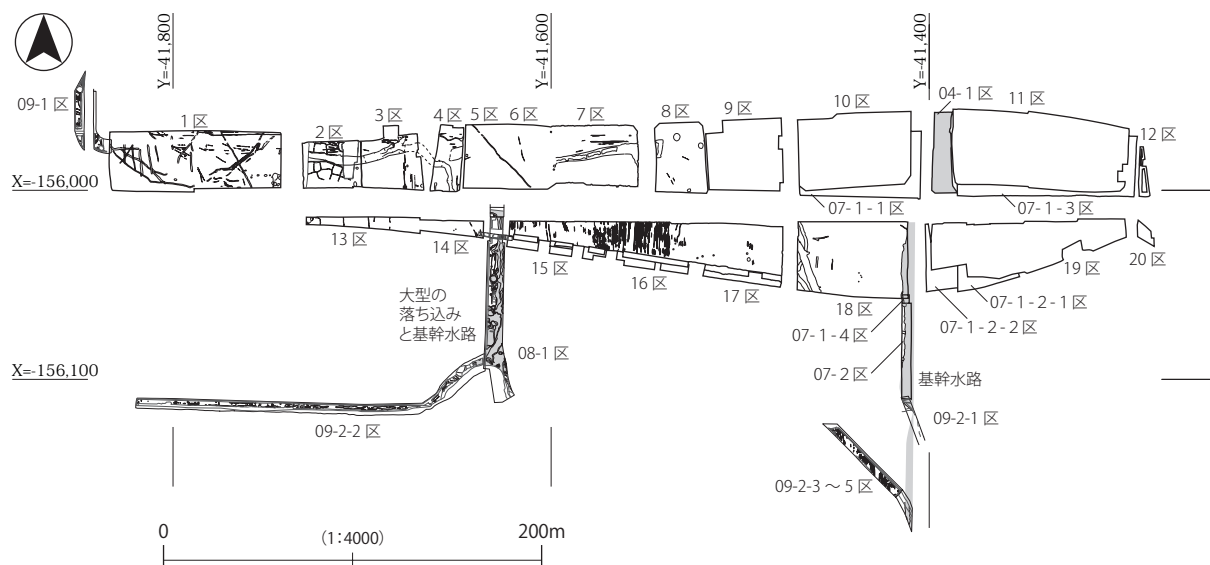


図24 中世～近世の三宅西遺跡 (第3層下面)

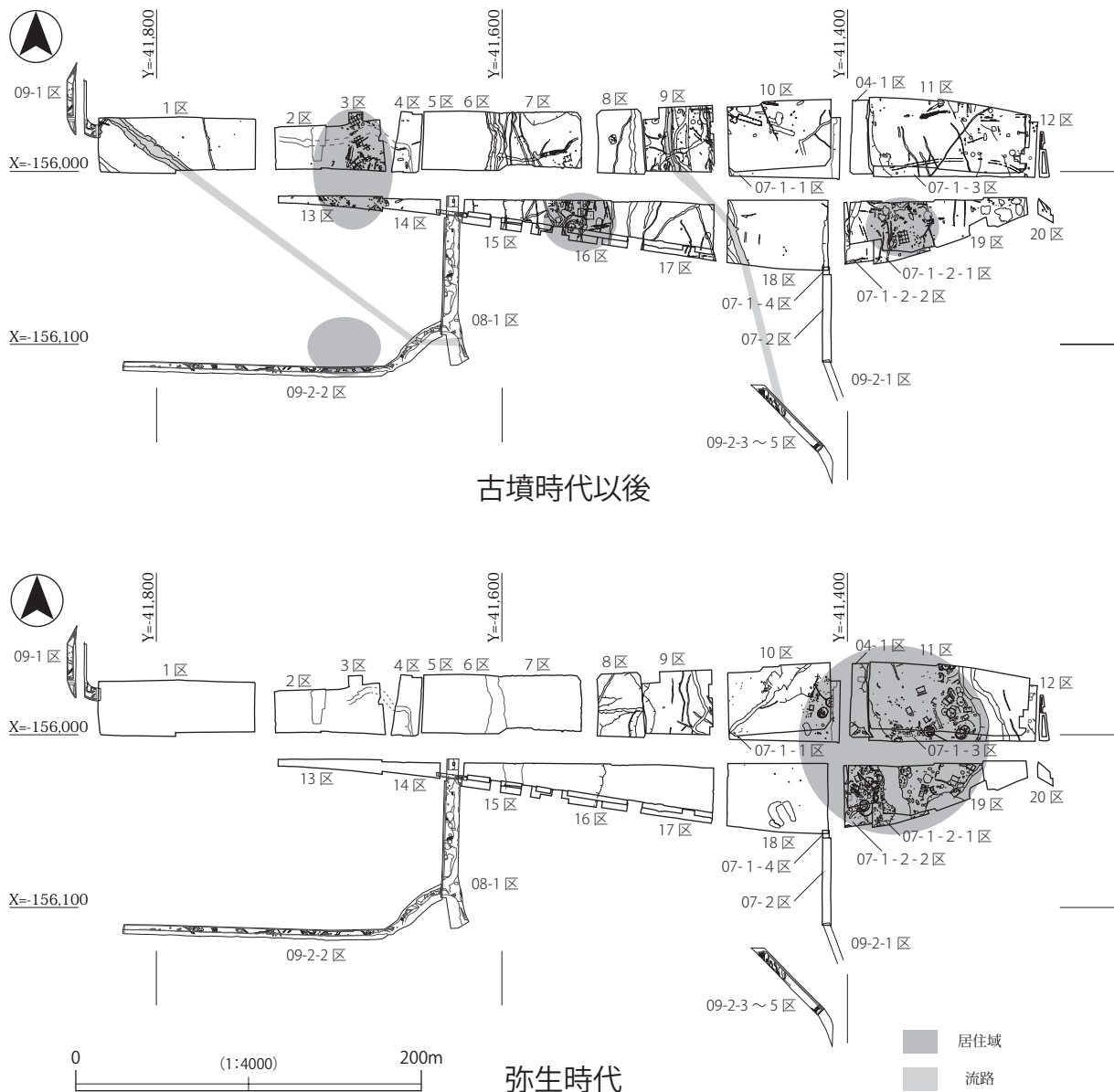


図25 弥生時代～古代の三宅西遺跡（第7層下面）

代前期後半～中期の土器が多く出土した。この流路からは、百済系の陶質土器も出土している。この溝は、規模も大きく、直線的なものであることから、人為のものの可能性もある。遺跡範囲の北西端に相当する1区では、水制と考えられる施設が設けられており、水利に用いられたと考えられる。

後者は、分布域が調査区に散在しており、明瞭な区画を有さないが、地形に沿った軸で掘立柱建物を配置している。このほか、詳細は明らかでないものの、規模の小さな土坑状の掘込みが連続する「波板状遺構」を検出している。硬化面の存在が不明瞭であるため、根拠が乏しい面は否めないが、道路の路床部の施設の可能性が指摘されている。

〔弥生時代〕（図25）

第2面〔第7(e)層下面〕で検出できる遺構・遺物が相当する。遺構・遺物の分布は調査区の東側に集中している。主な検出遺構としては、中期前葉に帰属する竪穴建物・掘立柱建物から構成される居住域を検出している。居住域の分布は東側で流路、西側で地形の傾斜を境に濃淡の違いが認められ、概ね東西で約100mの規模で展開していたと考えられる。また、居住域の西側では、方形周溝墓からなる墓

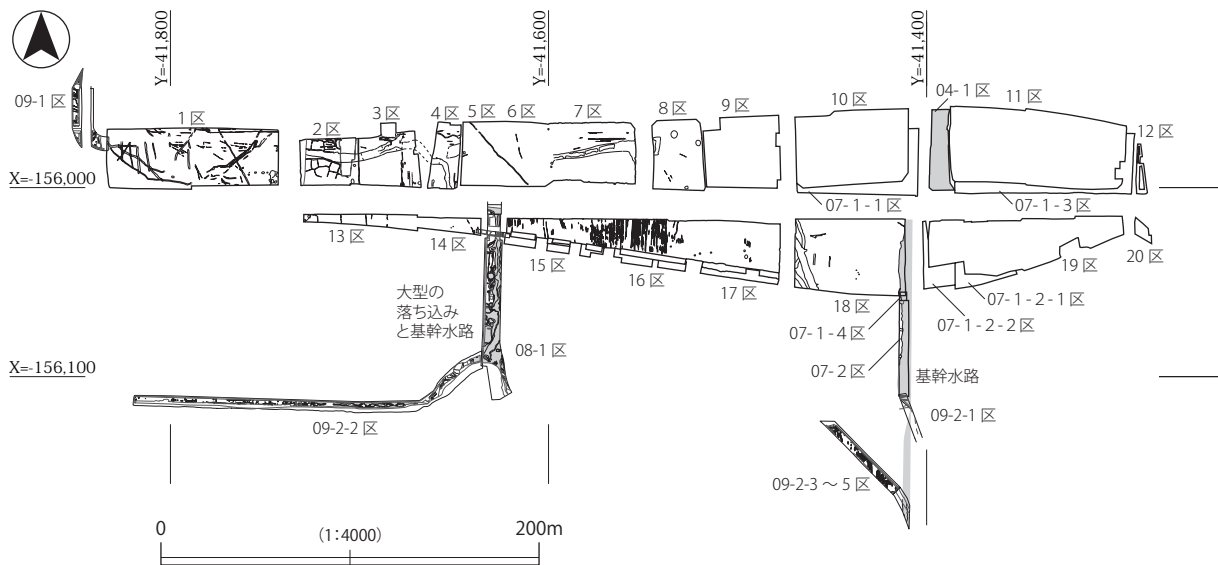


図26 縄文時代の三宅西遺跡（第9層上面）

域も検出できている。なお、竪穴建物からは、多数のサヌカイト製の製品・剥片・石核とともに礫石器等が出土しており、石器製作の実態を明らかにする上で、重要な知見を加えることができた。

なお、竪穴建物の個々の分析、出土土器からみた集落構造の変遷については、既往の成果の森井氏の総括に詳述されている（大文セ2009）ため、ここでは述べない。

〔縄文時代〕（図26）

第3面（第9層上面）で検出できる遺構・遺物が相当する。主な検出遺構としては、流路・土坑・倒木痕状の落ち込み等がある。流路は蛇行して南から北へと流れる大規模なものである。本面に帰属する流路を最後に、氾濫体積は一定落ち着いた様相をみせ、これらの流路によって運搬された水成堆積物は、以後の基本的な地形を形成している。流路からは縄文時代後期中葉の良好な土器群を検出している。

以上のように、三宅西遺跡の調査成果から、遺構・遺物の分布を整理し、遺跡の内容を概観した。今回の調査成果は、発掘調査件数が少なく、従来様相が明らかでなかった本地域において、多くの資料を蓄積することができたという点でも極めて意義深い内容であった。主要な成果に対して積み残した事柄も多いが、今後の周辺の更なるデータの蓄積によって明らかにされるものとする。

〔参考文献〕

- 井上正雄 1921 『大阪府全志 巻4』（復刻版 1985 清文堂出版）
- 日下雅義 1980 『歴史時代の地形環境』古今書院
- 趙 哲濟 1994 「大阪平野の旧石器遺跡—特に古大阪平野における遺跡の立地について—」
『瀬戸内技法とその時代』 中・四国旧石器文化談話会 243—252
- 趙 哲濟 2001 「瓜破台地東北部の段丘について」『大阪市文化財協会研究紀要』4 7—16
- 松原市 1985 『松原市史 第1巻』
- （財）大阪市文化財協会 2000 『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』
- （財）大阪府文化財調査研究センター 2000 『大和川今池遺跡（その1・その2）』
- （財）大阪府文化財センター 2009 『三宅西遺跡』
- （財）大阪府文化財センター 2009 『大和川今池遺跡Ⅰ—難波大道の調査—』
- （財）大阪府文化財センター 2010 『池内遺跡』

写 真 图 版

1. 3区 基本層序
(北西から)



2. 4区 基本層序
(北西から)



3. 5区 基本層序
(北西から)



図版2 3～5区 遺構



1. 3区 第1面 全景
(南東から)



2. 4区 第1面 全景
(南東から)

1.3区 第1面
1土坑 断面（東から）



2.5区 第1面
23水路（北西から）



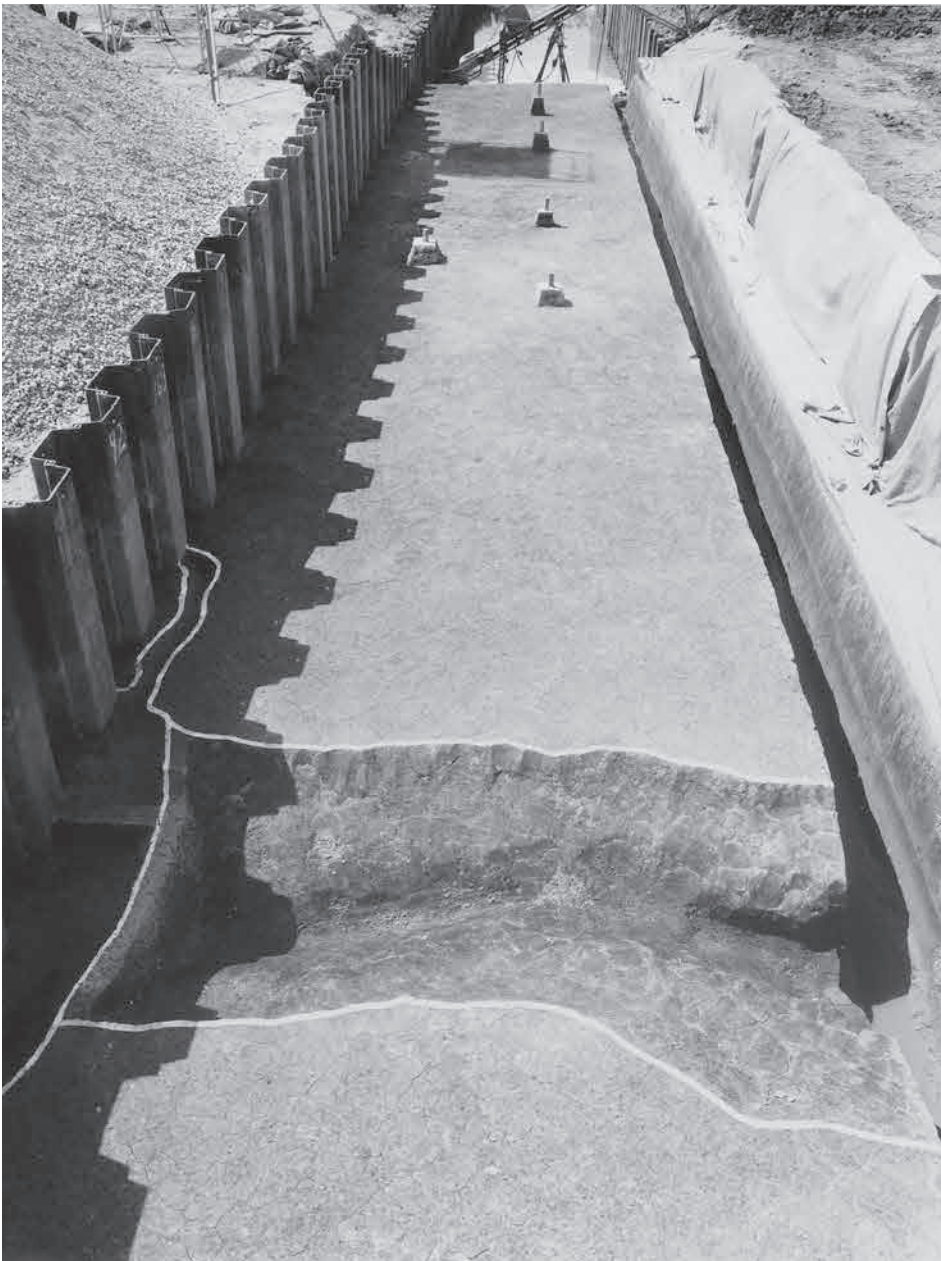
3.5区 第1面
23水路 断面（西から）



図版4 3～5区 遺構



1. 3区 第2面 全景
(南東から)



2. 4区 第2面 全景
(南東から)



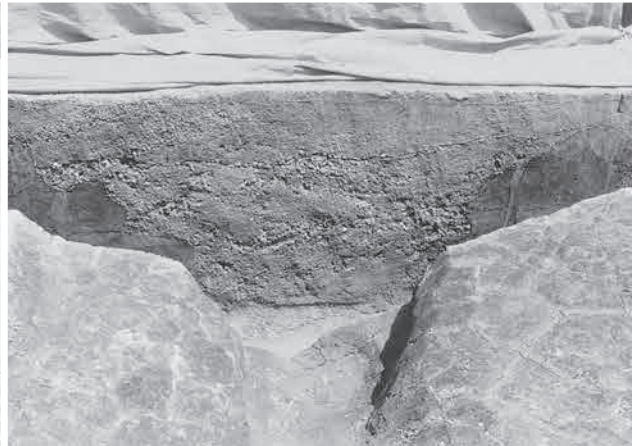
1. 3区 第2面 3流路 断面 (南西から)



2. 3区 第2面 3流路 遺物検出状況 (西から)



3. 3区 第2面 3流路 遺物検出状況 (東から)



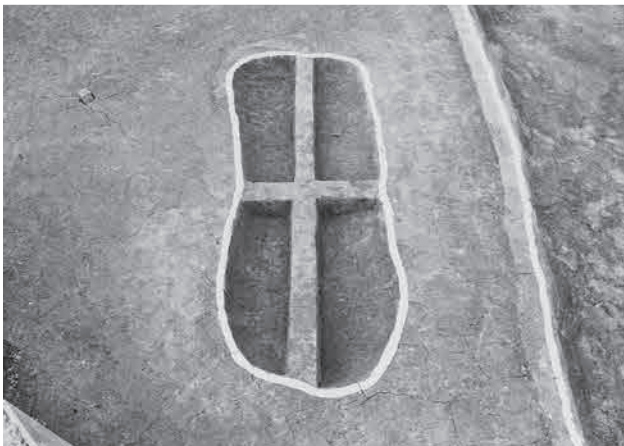
4. 4区 第2面 15溝 断面 (西から)



5. 3区 第2面 5土坑 断面 (南東から)



6. 3区 第2面 5土坑 遺物検出状況 (東から)



7. 3区 第2面 4土坑 (南から)



8. 3区 第2面 4土坑 断面 (南から)

図版6 3～5区 遺構



1. 3区 第3面 全景
(南東から)

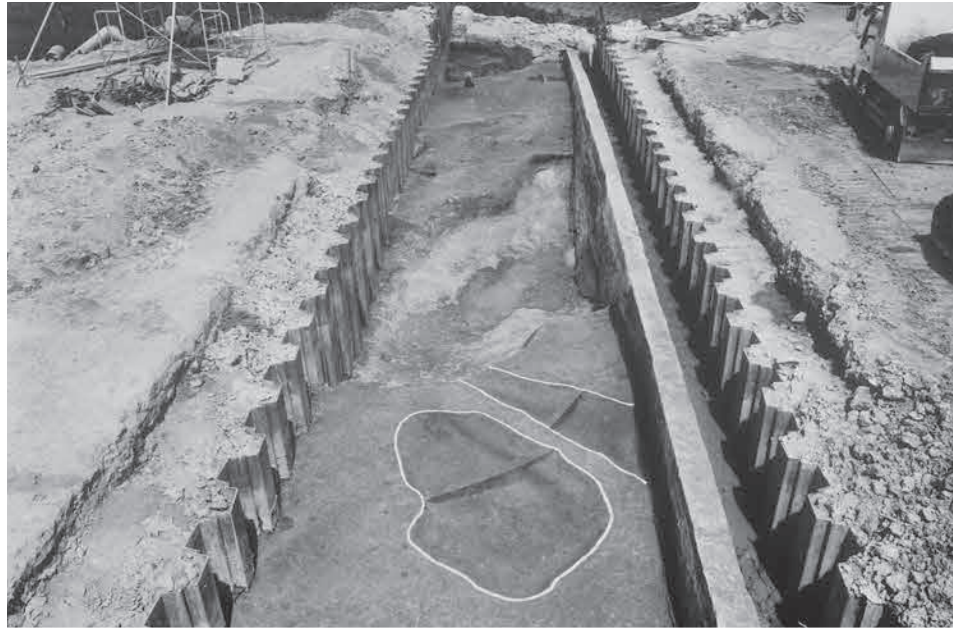


2. 4区 第3面 全景
(南東から)



3. 3区 第3面 7溝
断面(北から)

1. 3区 第4面 全景
(南東から)



2. 4区 第4面 全景
(南東から)



図版8 3～5区 遺構



1. 4区 第4面 17土坑
断面（南東から）



2. 3区 第4面 13土坑
断面（南東から）



3. 3区 第5面 10溝
断面（東から）



1. 第1面 全景
(南から)

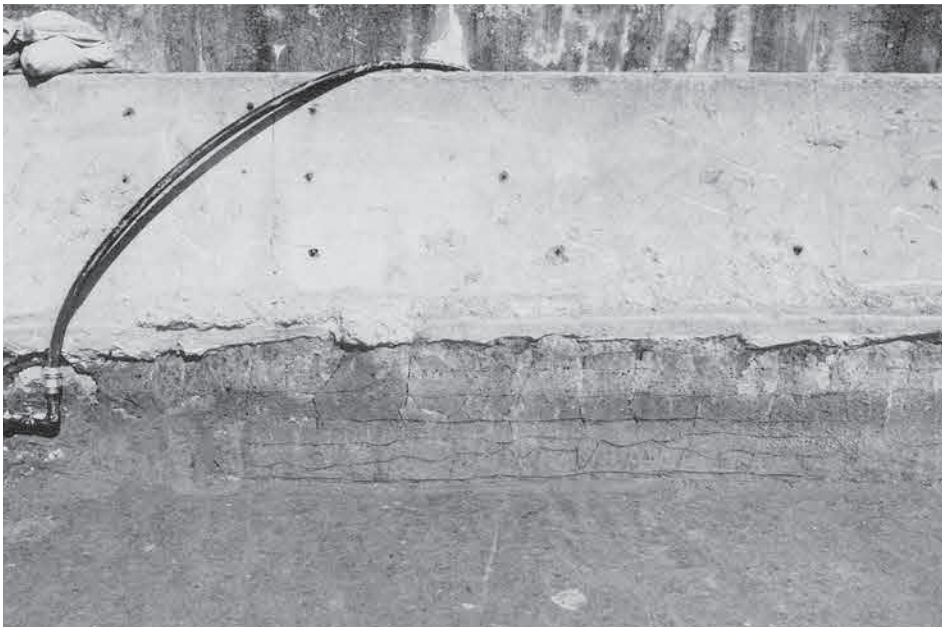


2. 基本層序
(北西から)

図版 10 2区 遺構



1. 西側 基本層序
(南西から)



2. 中央部 基本層序
(南から)



3. 東側 基本層序
(南から)



1. 西半部 第1面 全景
(西から)



2. 東半部 第1面 全景
(南西から)

図版 12 2区 遺構



1. 第1面 101 落ち込み 断面 (南から)



2. 第1面 69井戸 断面 (南から)



3. 第1面 42土坑 断面 (南から)



4. 第1面 48土坑 断面 (南から)



5. 第1面 51土坑 断面 (南から)



6. 第1面 49土坑 断面 (南から)



7. 第1面 43土坑 断面 (南から)



8. 第1面 84土坑 断面 (南から)



1. 西半部 第2面 全景
(西から)



2. 東半部 第2面 全景
(南西から)

図版 14 2区 遺構



1. 第2面 掘立柱建物1 (西から)



2. 掘立柱建物1 118柱穴 断面 (西から)



3. 掘立柱建物1 119柱穴 断面 (西から)



4. 掘立柱建物1 120柱穴 断面 (東から)



5. 掘立柱建物1 121柱穴 断面 (西から)



1. 第1・2面 100溝 断面 (南東から)



2. 第1・2面 100溝 遺物検出状況 (東から)



3. 第2面 110溝 断面 (南東から)



4. 第2面 110溝 遺物検出状況 (南から)



5. 第2面 108溝 断面 (南東から)



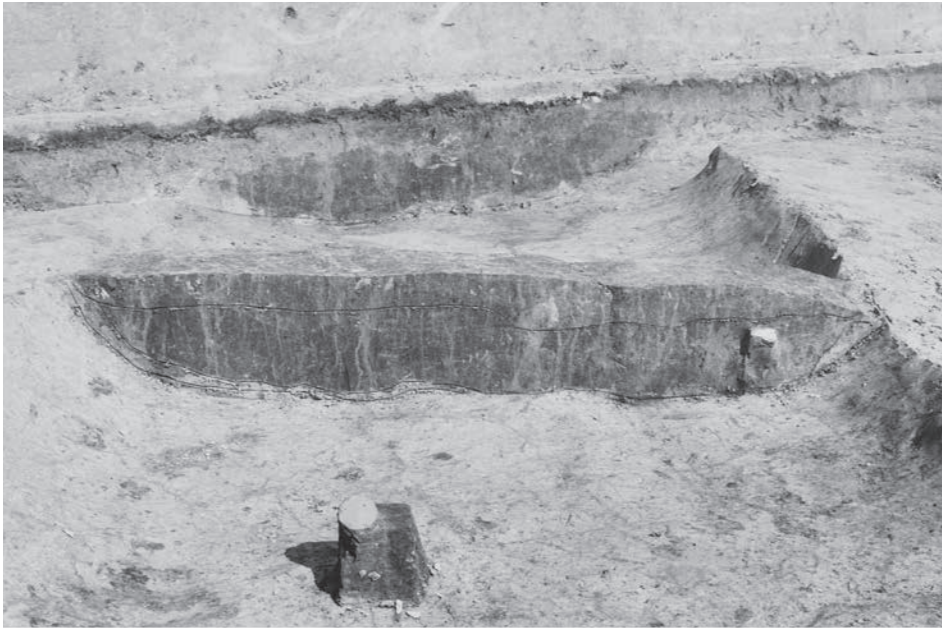
6. 第2面 109溝 断面 (南西から)



7. 第2面 102溝 断面 (南から)



8. 第2面 106溝 断面 (南から)



1. 第2面 117土坑
断面（南西から）



2. 第2面 117土坑
遺物検出状況（西から）



3. 第2面 104土坑
断面（西から）



1. 西半部 第3面 全景
(西から)



2. 東半部 第3面 全景
(南西から)

図版 18 2区 遺構



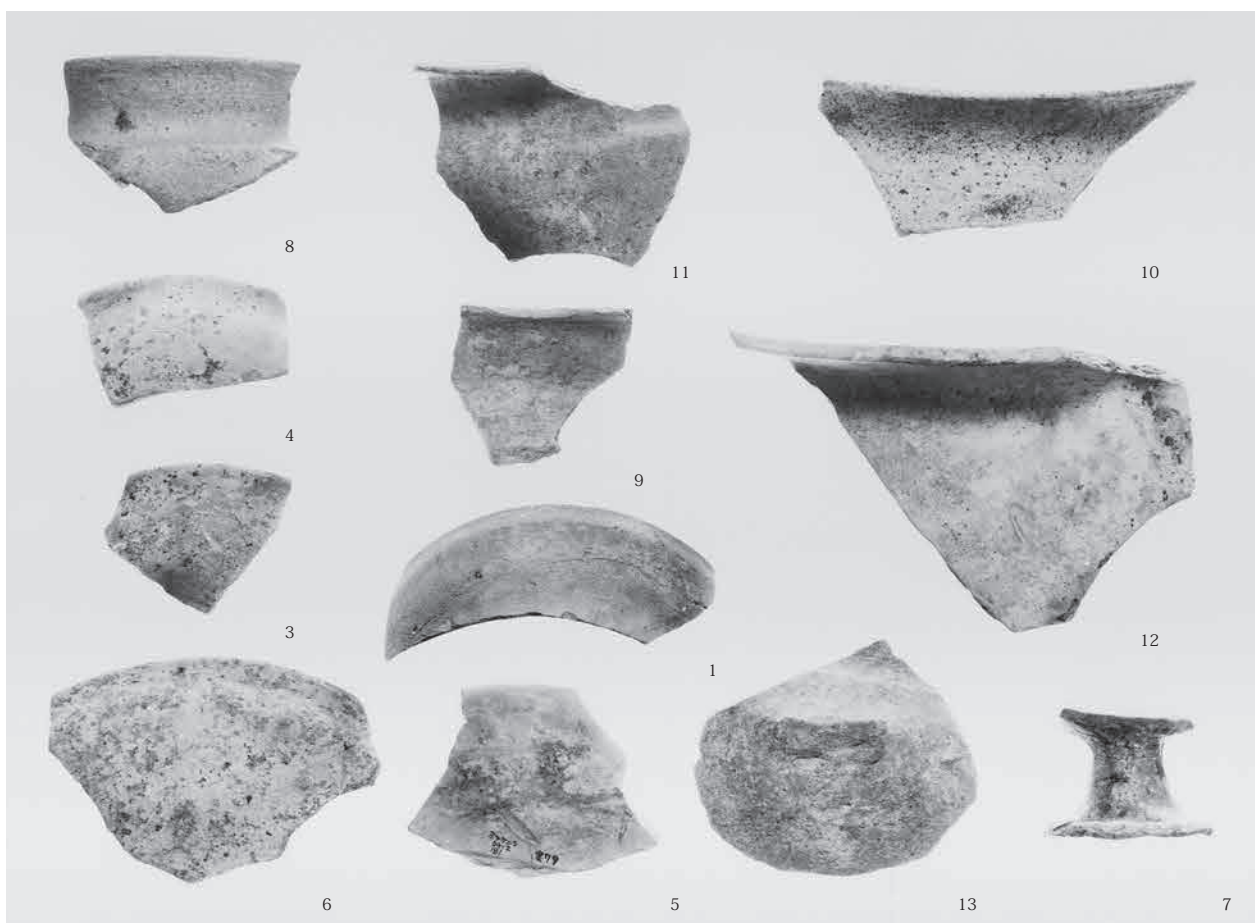
1. 第3面 139 流路
断面（南から）



2. 第3面 141 流路
断面（南東から）



3. 第3面 142 流路
断面（南西から）



1. 3~5区 第2面 3流路 出土遺物 (1)



2. 3~5区 第2面 3流路 出土遺物 (2)

図版 20 遺物



2

3~5区 第2面 3流路



33

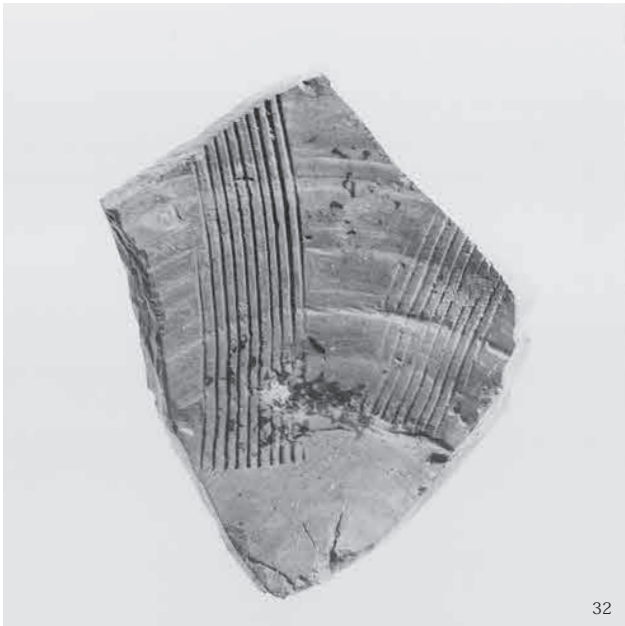


19

3~5区 第3面 7溝



35



32

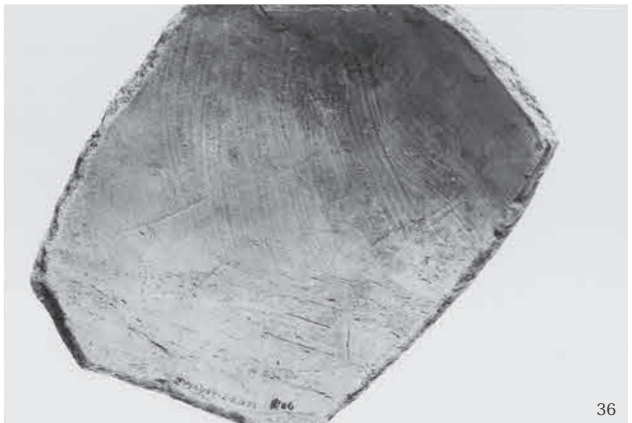
2区 第1面 99溝



38



2区 第1・2面 100溝



36



39



51



37

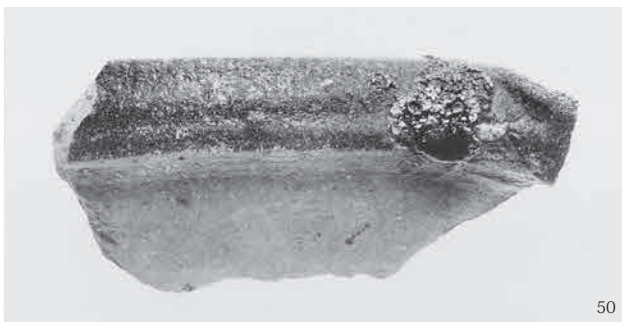
2区 第1・2面 100溝



54



44

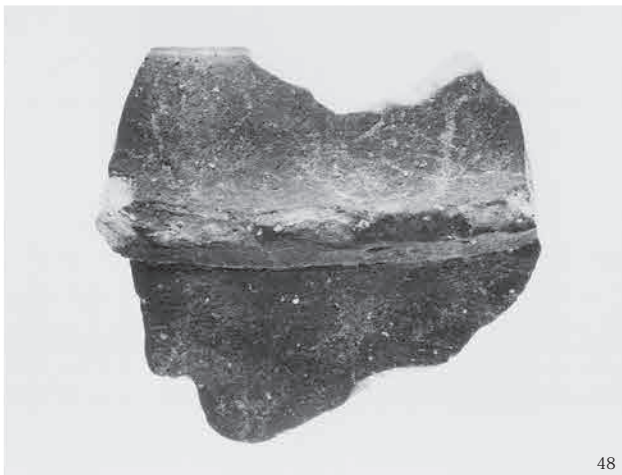


50



47

2区 第2面 110溝



48

2区 第2~3層

報告書抄録

ふりがな	みやけ にし いせき に						
書名	三宅西遺跡Ⅱ						
副書名	都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第204集						
編著者名	正岡大実 森屋美佐子						
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072 - 299 - 8791						
発行年月日	2010年7月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
みやけにし 三宅西遺跡	おおさかふまつばらし 大阪府松原市 みやけにし 三宅西5～7 みやけなか 三宅中7	27217	26	北緯 34° 59' 16" 東経 135° 54' 84"	(09-2調査3～5区) 2009.07.15～2009.08.25・ 09.02・09.11	340㎡	都市計画道路 大和川線外建設 (阪神高速道路 大和川線)
				北緯 34° 59' 18" 東経 135° 54' 86"	(09-2調査1区) 2009.10.09～2009.10.23	105㎡	
				北緯 34° 59' 18" 東経 135° 54' 50"	(09-2調査2区) 2010.01.13～2010.03.01	702㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
三宅西遺跡	集落・ 生産	中世～ 近世	水路・溝・耕作溝・土 坑・落ち込み		瓦器・瓦質土器・土師 器・陶磁器	坪境の水路に接続する 落ち込みを検出。	
		古代	流路		土師器・須恵器		
		古墳時代 前～中期	溝・掘立柱建物・ 土坑・溝		土師器・須恵器		
		弥生時代 後期	溝・土坑・小穴・ 落ち込み		弥生土器		
		縄文時代	流路		縄文土器		
要約	<p>縄文時代～中世にかけて連続と続く遺構面を検出した。 特に古墳時代の遺構面では、前期～中期にかけての遺構・遺物を確認することができた。2004年度から実施した三宅西遺跡の調査成果と併せて考えると、古墳時代集落の領域を考える上で重要な成果である。 今井戸川に併走する調査区では、今井戸川とほぼ同じ規模の水路を確認しており、埋土中から13世紀代の遺物を検出していることから、周辺地域の灌漑施設の整備の時期について重要な知見を加えることができた。</p>						

(財)大阪府文化財センター発掘調査報告書 第204集

三宅西遺跡Ⅱ

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2010年7月30日発行

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社 明新社
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地